和歌山県立近代美術館

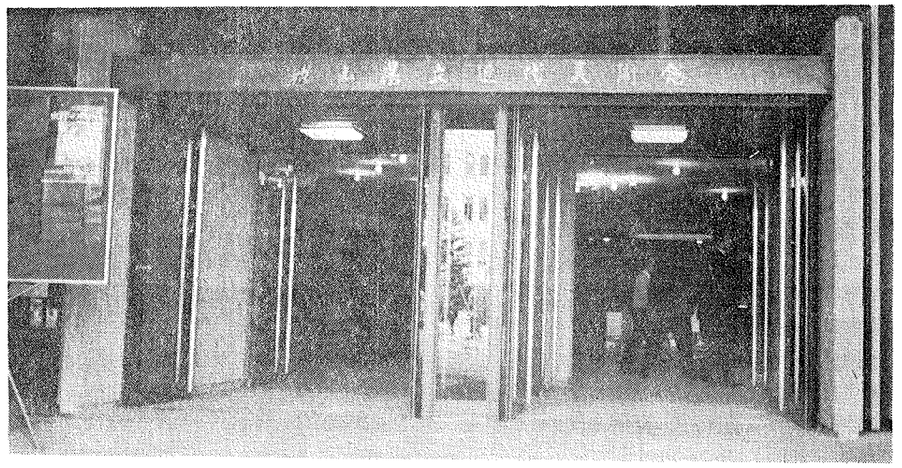
年　　報

昭和48年度

和歌山県立近代美術館

年　　報

昭和48年度



目　　次

研究報告「川口軌外とキュビスム」…… 1
1　主要行事…… 11
2　主催展覧会　日本伝統工芸展…… 12
昭和48年度前期常設企画展…… 15
川口軌外展…… 16
昭和48年度後期常設企画展…… 20
第1回移動美術館「和歌山の作家展」…… 21
3　共催展覧会…… 22
4　貸館展覧会…… 23
5　普及活動…… 24
6　本年度購入・寄託作品…… 26
7　所蔵品貸出状況…… 29
8　美術館協議会委員名簿…… 29
9　職員構成…… 29
10　館内配置図…… 30

研　究　報　告

川口軌外とキュビスム

学芸員　酒　井　哲　朗

はじめに

昭和48年度の本館特別企画展として「川口軌外展」を開催したが、その折、軌外の生涯にわたる1000点余の作品をまとめて観る機会を得た。その中には、滞欧中の作品が相当数含まれている。多くは習作として描かれたもので、年記や署名のない作品が大部分であるが、年記のある作品を中心に、断片的な記録を補えば彼の絵画研究の足どりの輪廓が推測できる。

軌外の滞欧は、大正８年12月～大正12年５月、大正13年３月～昭和４年５月の２度、８年７カ月に及ぶ。足かけ10年の長きにわたって、実に多様な研究を行っているが、彼の芸術の基盤は、この間に形成されたとみられる。

軌外の芸術は、その構成的な作風によって、キュビスムの系譜につながるといわれているが、彼の芸術形成の跡を探りながら、キュビスムにどう触れ、どのように理解し、受容したのか。そしてまた彼の作風の特色について、この小論において考えてみたい。

第１回　渡仏時代

大正９年12月、軌外は日本郵船「あけぼの丸」でフランスに向かった。渡仏以前の彼は、二科展入選程度（註１）の画歴をもつにすぎない無名の画学生だった。

1930年協会の画家達のパリ時代の交友は、日本近代洋画史の青春像の一コマとして、しばしば語られるが軌外はパリで彼らと知り合った。大正10年に、里見勝蔵、木下孝則、硲伊之助らが渡仏し、やがて小島善太郎、須田国太郎、中山巍、前田寛治、佐伯祐三、中野和高、宮坂勝、清水登之、福沢一郎、伊原宇三郎、伊藤廉らと、軌外の交友の輪は広がっていく。軌外のフランスにおける絵画の研究は、これらのすぐれた個性と接触することによって、新鮮な刺激を受け、互いに研鑽し合いながらすすめられるのである。

それでは、第１回渡仏時代の軌外の研究はどのようにすすめられたのか、作品に即してみていきたい。

この期間の彼の作品に、年記の記されたものは全くみられない。彼はまた、滞仏中の日記や制作に関するメモのような記録の類をまるでのこしていない。したがって、詳細を再現することはできないが、里見勝蔵の証言が、手がかりを与えてくれる。軌外の勉強ぶりをよく伝えているので、少し長いが引用する。

「巴里で、川口はシテ・ファルギエールの画室に住っていた。毎日モデルを来させて裸体や着衣を描きつづけた。全くよく勉強した。朝から夕暮まで、決してボンヤリ休息したり、遊んだりしている姿を見なかった。夜もしばしばクロッキーにアカデミーへ行った。……中略。彼は最初の頃、ルノアールの写実を研究して――ルノアールはセザンヌより写実家だと云った。同様に伊太利旅行、ローマに於て、ラファエルとチシアン、ルーブルに於てベラスケス、チントレットを模写した。乃ち、ルノアールを通じてベニスの古大家を知り、古大家のマチエールを研究して、ルノアールをより了解した。その事は後半、彼が純粋な個性川口を制作に表現する為に、非常に役立つ所の基礎的研究だったのだ」（註２）

模写は、ティツィアーノ「スザンヌ・オーバン」（フロレンス美術館）、ティントレット「ヴィーナス」（ルーブル美術館）、ルノアール「鏡に向うガブリエル」（ルーブル美術館）の３点が現存する。ルノアール風の作品は「少女とミモザの花」（写真１）、「婦人像」「裸婦」「バラ」等がのこっている。このうち「少女とミモザの花」は、大正11年の第９回二科展に出品されたことがわかっているので、この種の作品のおよその制作年代は推定できる。

モデルを呼んで描いたと思われる作品の中に「少女像」（写真２）のような作品がある。明暗を基調にモデルを忠実に描いた写実的な作風である。渡仏以前の作品に、1917年の年記をもつ「裸婦」（写真３）があるが、「少女像」の方が技術的に進んでいるものの、両者は同じ方法にしたがって描かれている。このことから「少女とミモザの花」の以前に「少女像」のような作風があったと考えたい。

「少女とミモザの花」は、モデルの写生によって制作した作品であろうが、形態のモデリング、タッチ、色彩の扱い方等、いろんな点でルノアールの模倣に近い。裸婦や着衣のモデル、バラ等、この種の作品とルノアールを模写した「鏡に向うガブリエル」との間に、構図はともかくとして、描法において截然たる区別がつけ難い。事実、二科展に出品された「少女とミモザの花」など５点の作品評は、ルノアールの悪しき模倣とされ、あまり芳しいものではなかった（註３）。

軌外の画風は、明暗による写実的表現からルノアール風の色彩による量感や奥行きの表現に移っていったのだが、「ルノアールはセザンヌよりも写実家だ」というように、彼の芸術の尺度は写実であり、伝統的なパースペクティブや解剖学的モデリングによって制作されている。この時点で彼の関心は、セザンヌの構築的な画面よりもルノアールの官能的な色彩表現に向けられている。

「……ドラン、ヴラマンク、ユッチロ、ルオー、ブラック、モディリアニは巴里に来て初めて見たのだ。野獣派や立体派の作品を画商の窓や展覧会で実に驚異した。更に川口も僕もヴラマンクに初めて会った時、非常に面喰ったのも無理ではなかった」（註４）。

里見勝蔵が回想しているが、この頃の軌外は、まだキュビスムと遠い地点にいる。

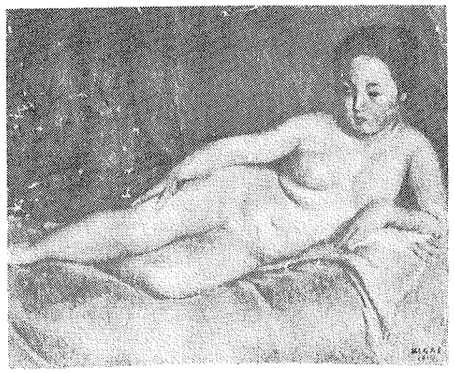
彼は大正12年５月に１度帰国し、大正13年３月に再びパリに戻るが、大正11年頃から大正13年までの約２年間の制作を確証できる作品を見出し得ない。1924年の年記をもつ「パリ風景」（写真４）では、彼の画風は一変している。この間に軌外の内部で何かが起ったようである。

軌外の帰国中に開かれた、大正12年の第10回二科展には、マチス、ドラン、ピカソ、デュフィ、ブラック、ロート、ビッシェール、ブランシャール等の諸作が出品され、ロートやビッシェールに学んだ黒田重太郎が「シャトルーズの庭」「一修道僧の像」などのキュビスムの影響を受けた構成的な作品を出品していた。推測にすぎないが、こういった日本の画壇の動向が、彼の作風転換を促す外的契機になったのかも知れない。

No.１「少女とミモザの花」

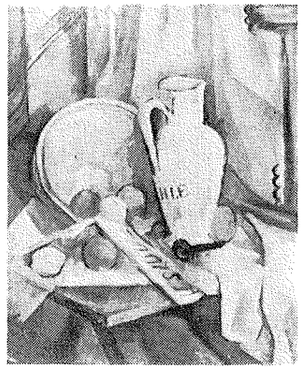
No.２「少女像」

No.３「裸婦」



No.４「パリ風景」

No.５「静物」



第2回　渡仏時代

大正13年3月から昭和4年5月までの作品には、制作年代の明らかなものがあるため、軌外の研究の跡をある程度うかがうことができる。おもな作品を記すと次の如くである。

大正13年　「パリ風景」
大正14年　「静物」「裸婦」「ワインのある静物」
大正15年　「風景－モントバン」
昭和2年　「寺院」「キャフエにて」「座する女」「マンドリン」(昭和2～3年)
昭和3年　「車のある風景」「ボヘミアン」「バナナのある静物」

これらの作品中、大正15年～昭和3年の諸作は、彼の帰国直後、滞仏中の成果として、第16回二科展に特別出品され、1930年協会第5回展にも出品されて、日本における軌外の評価を決定的なものにした。

「パリ風景」(写真4)は、木立ちの向うに見える二軒の建物を描いた、パリ郊外の風景であるが、ここには以前の印象派的表現はみられない。

樹幹から上に伸びる木立ちは画面において垂直のリズムをつくり、画面の下部及び中央の横に区切る道や土手、上部の横に伸びた木の枝は水平の動きを与えている。中景の白壁に赤屋根の建物の鋭角的な形態が木立ちや道や土手のなだらかな線と対照させられている。色彩は緑や褐色を主調に全体に暗く、建物の赤と白が対比の効果を強めている。この作品では形態が単純化され、平面的に処理されており、色彩もそれに従っている。ここには、形態と色彩という造型の基本的要素によって画面を構成しようとする意図が認められる。

このような制作態度は、大正14年に描かれた「静物」(写真5)や「裸婦群像」(写真6)において、ちがったかたちで現われいる。

「静物」は、テーブルの上に置かれた水差し、鉢、果実、パイプ、布といった物体を高い視点から見おろしたかたちで描いている。これらの物体の線や面は、背景の柱、床、カーテンの線や面とともに、画面全体の秩序に従って、デフォルメされ、組み立てられている。「裸婦群像」も対角線や水平、垂直の線、円弧などの幾何学的な形態を基本にした構築的な画面である。ここに描かれている3人の裸婦は、画面構成の形態的要素として、物体と同じに扱われている。

これらの作品は、アンドレ・ロートの影響によって制作されたものである。大正11年頃やはりロートに学んだ黒田重太郎が「渚に座る女」「港の女」(写真7)等、同じ手法による一連の作品を描いている。こういったセザンヌ風の表現は、ロート門下の教程規範的な作風だったのだろうか。

翌年の「風景－モントバン」(写真8)は、俯瞰的に展望された街景であるが、画面は下から上へ建物、道路、樹木などの単純化された幾何学的形態の集積によって構成されている。色調は「パリ風景」以来の暗い調子で、異なった角度からみられた個々の対象を画面に統一するのは、前年の「静物」においてもみられるが、この作品ではもっと概念的になっている。

昭和2年から3年にかけて「寺院」「車のある風景」「マンドリン」などが描かれている。「寺院」はそれ自体構築的である教会の建物を前面に大きくクローズアップさせ、「車のある風景」(写真9)では、2台の荷車を配することによって、形態的効果を強めているが、「パリ風景」の延長線上の制作として考えられる。同じ頃、軌外の作品の中で、キュビスム風の作品として知られている「マンドリン」が描かれているが、この作品については後に触れる。

これらの作品と並行して「座する女」や「キャフェにて」などの一群の人物画がある。

「キャフェにて」(写真10)は、キャフェの壁を背景にテーブルの前に座って頬杖をつく女の像を、全く平面的に、輪廓線によって区画し、形態を要約して把えている。背景は色面として処理され、背景の照明器具や画中画、椅子、人体各部、前景のテーブル、酒瓶、グラス、これらが画面の構成要素として用いられ、全体を支配するのは、円、垂直、水平等の幾何学的原理である。

いくつかの作品についてみてきたように、第2回渡仏時代の軌外は、対象の再現的描写や一点透視法的な遠近法による空間把握をやめ、彼の関心は、二次元平面における形態の構成という問題に向けられている。その追求は「キャフェにて」「車のある風景」「マンドリン」などの作品のヴァラエティに現われているように、一元的に展開されてきたわけではなかった。静物画はもとより、風景画においても「寺院」や「車のある風景」にみるように、画面の構成に適したモチーフが選ばれている。「マンドリン」のように、キュビスムに近づく場合もあれば、幾何学的方法によって制作されていても、「キャフェにて」のように、フォーブ系の作品に近い様相を示す場合もある。

セザンヌやピカソは、形態を純粋に追求するためにしばしば色彩や質感を犠牲にすることがあった。軌外の場合、そのような傾向は、ロート風の作品のうちにある程度認められるかも知れないが、同時に「ワインのある静物」「(写真11)のような、対象の質感表現を目的とした作品が存在する。大正15年から昭和3年にかけての彼の制作は、形態の構成とともに色彩表現にも苦心が払われている。この頃の軌外の作品のあるものが、キュビスムに接近した頃のドランの作品を連想させるのはこのためだろう。

2度目のフランス滞在中に描いたと思われる年記のない習作が多数のこっている。この中には、ヴラマンク、デュフィ、モディリアーニ等を意識して描いたと思われるものがあり、その作域は広い。が、彼の追求は、滞仏中の成果として公開した上記の諸作に、次第に収斂されていったようである。

軌外の芸術のその後の展開を考えた時、見逃すことができないのは、滞仏末期に描かれたグワッシュ絵である。「魚を売る婦」「サーカス」「牛」などモチーフはさまざまだが、その中には「失題」(写真12)のような、のちに「スプニール」や「花束」などの作品に現われる天使を描いた、幻想的な主題が含まれている。特殊なラシャ地の紙を使って、ウルトラマリン、朱、黒、白などの絵具で奔放に描かれた、稚拙味のあるもので、明らかにシャガールを学んでいる(註5)。

キュビスムとの関係

これまで、在仏中の軌外の芸術形成の足どりを素描的にみてきたのであるが、軌外の芸術とキュビスムはどのような関係があるのだろうか。

少なくとも大正11年頃までの軌外は、印象派の視覚圏内にとどまっていたことは、さきにのべた。

「当時ようやく印象派の展覧会が少なくなり、ピカソやブラック等のキュービズムの回顧展があった。私はこれまで度々これらを見てきた筈だが、この何を描いたか解らない絵に、最も精神的なショックを受けている。恐らく私の一生を通じて忘れることはできないだろう」(註6)。

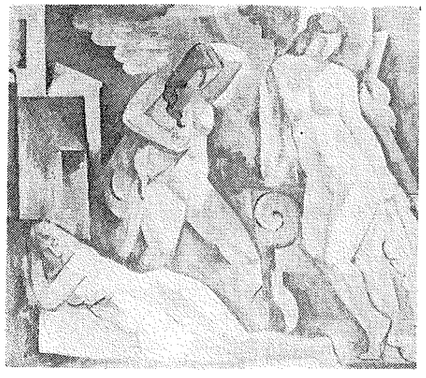
軌外はのちにこのように回想したが、彼のキュビスムへの接近はこの地点からはじまる。

「中頃からロートやレジェのアトリエに通い始めクラシックの教示を受け、しかもキュービズムの意義をかなりよく理解しえてきた頃、もう印象派的な描写はしなくなった」(註7)。

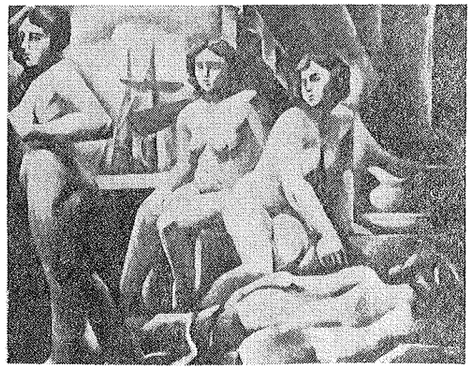
軌外自身が彼のキュビスムの理解のしかたを語っている。その時期は、彼の遺作から推して、恐らく大正13～14年頃であろう。

大正14年頃制作された「静物」や「裸婦群像」等一連の作品は、黒田重太郎の大正11年頃の作品との類似が示すように、ロートの影響を受けたことは明らかで

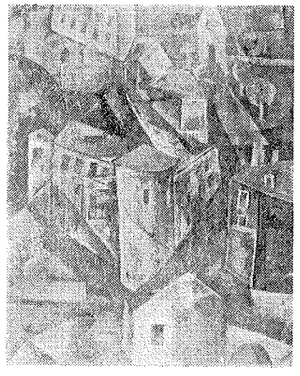
№6「裸婦群像」



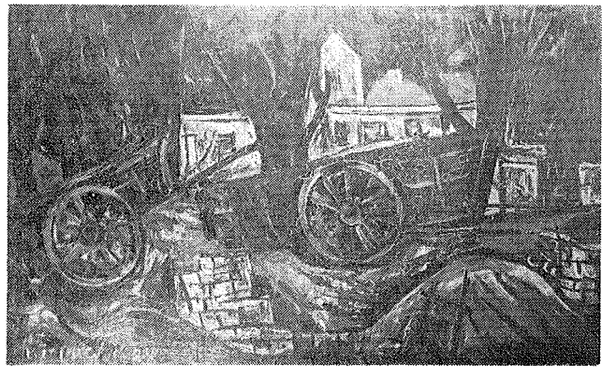
№7 黒田重太郎「港の女」



№8「風景—モントバン」



№9「車のある風景」



ある。

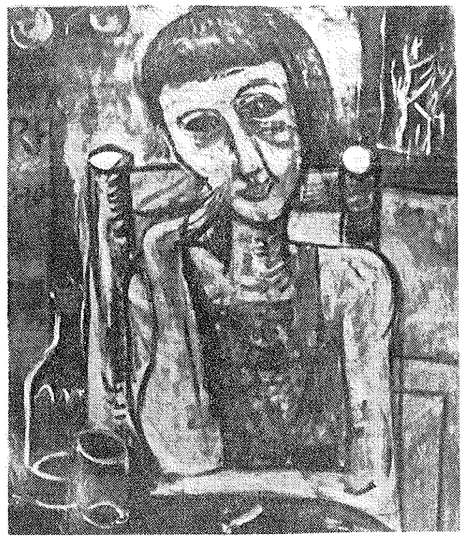
これらの作品にみられる、異なった視点からみられた対象を画面に統一する構成法、面と面との結合によって奥行きを表現する方法等、画面構築の原理はセザンヌの絵画理念によるものである。自然との関係において、視覚作用に忠実な点でも、キュビスムの亜流としてのセザニスムというべきだろう。

軌外の作品の中で、キュビスムにもっとも近いのは「マンドリン」(写真13)であろう。この作品では、テーブル、布、マンドリン、果実などの物体が俯瞰的に把えられ、ほとんど幾何学的図形にまで抽象化されている。さきの「静物」や「裸婦群像」にみられた空間の奥行きが、ここでは平面化されてしまっている。幾何学的方法によって構成されているが、自然的形態が解体されてしまっているわけではない。色彩の点でも対象を離れた純粋の色面として処理されているのではなく、物体のヴォリュームや明暗を暗示する色彩のコントラストやニュアンスが随所に用いられている。ここにみられるのは、画面構成のための対象の変形であり、平面化である。

あえて類比を求めるとするなら、ピカソやブラックの初期キュビスムの時代の作品、セザンヌの絵画概念を大胆に押し進め、キュビスム絵画の実験に着手した1908年頃の作品に近いといえよう。

1907年頃から、ピカソとブラックによってはじめられた近代絵画の実験は、1911年頃にはキュビスムの名とともに広がり、多くの追随者を生んだ。軌外が学んだロートもその一人であり、1912年のセクション・ドール展に加わっている。この展覧会は、創始者であるピカソとブラックを除いて、当時世人がキュビスムとみなした画家達が結集した、キュビスムの大デモンストレーションであり、以後多様な分岐を示すキュビスムの運動の結節点として、記念すべき展覧会だった。

No.10「キャフェにて」



キュビスムは、ピカソやブラックの分析的キュビスムを経て綜合的キュビスムに向った正統的な展開を軸に、レジェ、グリス、ドローネー、オザンファン、グレーズ、メッツァンジェ、エルバン、ル・フォーコニエ、ラ・フレネー、ロート、ヴィヨン、デュシャン、ピカビア等々、さまざまな傾向を包含する広範な運動だったが、ロートはこの中で、伝統的様式とキュビスムの結合を意図するもっとも保守的な立場である。ロートは時代や様式をこえた恒久的な絵画の普遍的法則を信じていた。

軌外に先だって、ロートに学んだ黒田重太郎は、大正14年に「構図の研究」(註8)を著したが、それはロートの絵画理論の理解の上に成立するものである。絵画の構図とは、二次元平面にひとつの新しい世界を建設する建築であり、幾何学でなければならないとして、ロートの次の言葉を引用している。

「自然は常に混沌に帰る傾きを有し、表面的に知覚せられるその細部の各々は、至高組織の持続に依って発測たる生彩を与えられているにも拘らず、混沌を反映する。至高組織は法則に依って明らかにされる。法則は幾何学に依って明らかにされる」(註9)

黒田の著書の第2章以下は、古典から現代にいたる西洋絵画の名作を例に、線、形態、色彩等の構成要素を分析しながら、絵画の構成原理の法則性を説いている。これはロートの絵画理論受容の一例証といえる。

軌外もまた、ロートのこのような絵画理論を学んだのである。上に引用したロートの言葉は、そのまま彼の制作原理としてあてはまる。第2回渡仏時代の彼の構成的な諸作は、ロートのいう絵画の幾何学に従って試みられた、多様な探求の所産である。彼もいっている。「ロートやレジェのアトリエに通い始めクラシックの教示を受け、しかもキュービズムの意義をかなりよく理解し得てきた頃、もう印象派的な描写はしなくなった」と。

では、軌外はレジェから何を学んだのか。

レジェは、キュビスムの制作方法を概念のレアリスムと定義し、絵画のレアリスムとは、造形の三要素、すなわち線、形態、色彩の同時的秩序化であり、この要素のどれひとつを欠いても、真に古典的であることはできない、という(註10)。そして同時的秩序化の方法として、線、形態、色彩のコントラスト、すなわち「複合的コントラスト」を主張する(註11)。

ロートの絵画理論を媒介にすれば、このような思想は、軌外には受け入れ易いものだろう。抽象的な定義のかたちでは、軌外の制作方法に適用できるかにさえみえる。だが、彼の作品にレジェの影響を具体的に認めることはできないし、また軌外は、レジェがしたように、キュビスムの方法を押し進めてはいかなかった。

軌外の制作は、すでにのべたように、ロートの手引きに従ってすすめられている。しかしながら、ロートの恒久的な絵画の普遍的法則という理念は、キュビスムをアカデミスムに堕する危険がある(註12)といわれるように、あらゆる様式を正当化できる面がある。実際、黒田重太郎は、ロートの絵画理論の基礎の上に、帰国後現実再理的な作風を樹立した。

しかし軌外は、ロートの絵画理論に基いて、前向きの姿勢で、彼の作風を展開させていく。こういった点に、概念のレアリスムによって、機械文明の時代に適切な絵画的等価物を創造しようとする、ダイナミックなレジェの絵画思想が、軌外の道標として、想定されていたかも知れない。

軌外がキュビスムと接触したのは、芸術運動としてのキュビスムはすでに終り、キュビスムが新しい芸術伝統を確立した、ポスト・キュビスムの時代である。この時点で、彼はロートやレジェに学んで、「キュビスムの意義を理解した」のである。だが、軌外の作品は「マンドリン」にしても、キュビスム風であっても、厳密な意味において、キュビスムの作品ということはできないだろう。この作品について、軌外自身が「普通いわれるキュビスムの作品ではない」(註13)といっている。しかし、それらの作品は、ロートやレジェを通じて軌外なりに理解した、キュビスムの絵画理論を前提にして、はじめて出現した作品である。

軌外は、セザンヌの絵画理念によって、キュビスムを発見したのではなく、ロートやレジェによって、とりわけロートの絵画理論によってセザンヌを、さらにさかのぼって、ルネッサンス以来の西洋絵画の伝統を学んだのである。

作風上の特色

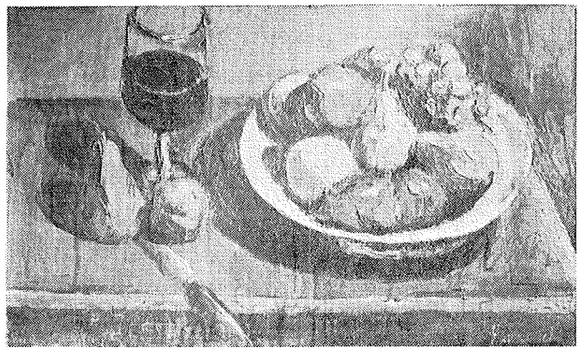
帰国後軌外は、昭和7年頃から「スブニール」「地維」「花束」「少女と貝殻」等、独立美術展に多くの作品を発表したが、そこには軌外独自の作風が確立されていた。

滞欧中の作品は、風景、静物、人物そのいずれにおいても、現実に目の前に存在する対象の形態を構成したが、「地維」や「花束」「少女と貝殻」のような作品は、幻想を主題として、風景、静物、人物すべてを包含している。

「少女と貝殻」(写真14)についてみると、この作品もまた、円、直線、曲線の交錯する幾何学的原理によって構成されている。その構成法は「マンドリン」以来の継続であり、「スブニール」や「地維」「花束」も同じ方法に従っている。ここでは純粋に幾何学的形態と少女のような具象的形態が、ひとつの画面の中に結合されている。画面は向かって右側の少女をとりまく貝殻や花や泡の部分と、左側の水平線を境界に上方の天使の部分、下方の貝殻の部分と大きく3つの部分にわかれている。これを結合しているのは、画面中央の斜線であり、左方の弧線である。画面全体を支配するのは、直線や曲線の対照と照応であり、抽象的形態も具象的形態も幾何学的原理に従って構成されている。

色彩表理には、ルドンやシャガールを学んだ形跡が

No.11「ワインのある静物」



No.12「失題」(グワッシュ)

みられる。だが、以前にルノアールを模倣したように模倣するのではなく、完全に自らのものにしている。色彩を、形態のモデリングのために用いるというよりそれ自体自立した画面構成の要素として、対照され、あるいは照応し、シンフォニックなファンタジーの効果を生み出している。

ここで言及しておかねばならないのは、軌外の作風のもうひとつの源泉となった、シュールレアリスムの影響である。

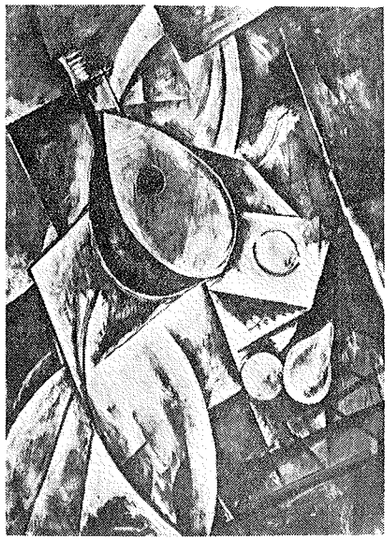
「少女と貝殻」の作品世界は、非現実的な幻想の世界であるが、このような傾向は、昭和５年の第17回二科展に出品された「月空」あたりからはじまっている。キュビスムは、自然の形態を解体し、再構成するが、常に対象は現実的世界にあり、その意味ではリアリスティックである。彼のこのような幻想的な表現は、非合理なものに絵画のリアリティーを求めたシュールレアリスムに通じるものである。

彼の第２回渡仏時代のパリは、シュールレアリスムの季節に入っていた。大正13年にアンドレ・ブルトンの第一宣言があり、大正14年には、エルンスト、キリコ、マン・レイ、アルプ、クレー、ミロ、マッソン、ピエール・ロアらの展覧会（ギャラリー・ピエール）が開かれていた。

この頃パリにやって来て、軌外とも交友のあった福沢一郎は、シュールレアリスムを学び、第１回独立美術展には、滞欧作として、シュールレアリスムの作品を出品している。

軌外の滞欧作の中に、こういった傾向を求めるとすれば、末期のグワッシュ絵においてである。グワッシュ絵は、主題の空想性において、色彩表現の幻想性に

№13「マンドリン」



おいて、非現実的である。これらは、シャガールの影響によって制作されたものであり、彼が大正15年にシャガールを訪れた時、もっとも印象にのこったのは、シャガールのいう幻想のリアリティだった。

軌外の幻想的表現は、人間の意識下の非合理の世界の表現というより、色彩によって謳う詩的な幻想が特色である。「少女と貝殻」や「花束」に先だって描かれた「陽炎」（写真15）や「花」は、対象自体は現実的なものでありながら、華麗な色彩表現によって、詩的なファンタージーと化している。

彼がすぐれた色彩家であったことは、里見勝蔵や福沢一郎ら、彼のパリ時代以来の友人達がひとしく指摘するところであり（註14）、彼の資質的なものである。はじめは、ヴェネチア色彩派を模写し、ルノアールの色彩表現に魅かれ、形態の構成の研究途上においても形態と色彩の両立を意図した。さらに、グワッシュ絵は、色彩表現の実験というべきもので、彼の色彩家としての特質は、その追求の過程に一貫して持続されている。

これまで、軌外とキュビスムの関係において、もっぱら彼の合理主義的な面に照明を与えてきたのであるが、彼は決して合理主義者ではない。彼は自らの制作態度について、構成論や色彩論にいかに通じていても絵は理論で描けるものではない。創造は無智の瞬間において生まれるものであるといっている。

「無智、創造への瞬間。知ることよりも、知らないもの、見えるものより、見えないものを恐れる者は叡智を与えられるだろう」（註15）。

知らないもの、見えないものへ恐れ、理性をこえたところに実在の本質を把えようとする態度、これは軌外のシュールレアリスム論である。直接には「地維」のような作品を指していっているが、彼の幻想的作風一般について該当しよう。こういった地点に、彼は主として、シャガールの導きに従ってやってきたように

思われる。

「少女と貝殻」や「花束」において、軌外はフランスにおいて、多様なかたちで追求してきた課題に解決を与えたというべきであろう。形態と色彩の問題、静物、風景、人物画、グワッシュ絵として、それぞれ別箇に表現されていたものが、ここではひとつの画面に統合されている。

シャガールが、キュビスムの切り開いた地平に幻想的な絵画世界を創造したように、軌外は、ロートやレジェに学んだ絵画理論によって、シャガールやルドンを媒介にして、独特の幻想的な作風を築いたということができよう。

「少女と貝殻」は、軌外の芸術の到達点を示すものであるが、彼の作域はきわめて広い。

同じ時期に「瀞峡」や「牡丹」「蓮」などの制作がある。「牡丹」と「蓮」は現在失なわれているが、これらの作品は、多くの写生によるエスキースをもとに成ったものである。「瀞峡」（写真16）は、岩壁と水面をモチーフにした、まさしく形態と色彩による構成であり、制作の基本原理において、「少女と貝殻」と異るものではない。

軌外は、彼の写生によるエスキースをもとにした作品と幻想的な作品との関係について問われ、次のように答えている。

「実在する形態は絵画と離して考えられないのであるが、絵画は実際しばしば、其のものから全く変形されているのはもっと（ママ）、確実に言へば変形されて自然の実在をより強く認識せしめるのは、絵画それ自身目から心への橋であり、自然（実在）と思想（自己）との空間に創造するからだと思う。絵画の本質はやっぱり実在する形態につながっていなければならないだろう」（註16）と。

絵画とは、自然の模倣ではなく、二次元空間における、それ自身の秩序をもつ創造物である。実在の真実を表理するためには、視覚のレアリスムによらず、概念のレアリスムによらねばならない。このような思想を軌外は、ロートやレジェを通じて、キュビスムから学んだ。さらに、シュルレアリスムの絵画概念を媒介にして、幻想的な領域にも踏み入った。が、とりわけロートに学んだ絵画の幾何学が、実践上の処方箋になっていたようだ。

戦後、「日傘と人」（昭和28年）「円」（昭和27年）などの抽象的な作品を制作した。

「日傘と人」（写真17）は、夏の海水浴場のスケッチをもとにできあがった作品である。この作品の解説において、軌外は彼の抽象画観を次のように語った。

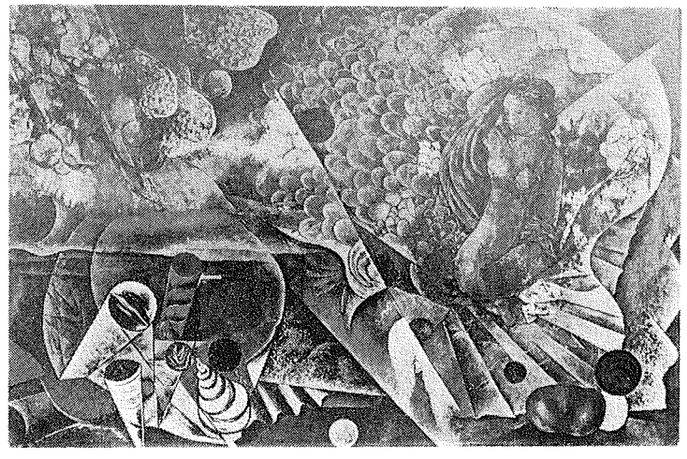
「抽象絵画のもっとも恐れねばならぬことは、単に線や画のリズムによる作法であろう。これは私達のまた自然の内奥にある成長する精神を見失うことになる。抽象の本質的なものは、やはり形態と精神の交流によって成長していくものである」（註17）。

この作品では、自然の形態が完全な幾何学的図形にまで抽象化されてしまっている。彼の絵画の幾何学を極限まで押し進めているといえよう。形態は勿論造形的要素として用いられているが、無意味な形態ではない。形態は、対象的自然と呼応し合う、一種の記号というべきものである。

色彩においても、平坦で一様に塗られた色面をコントラストさせるのではなしに、それぞれの色面の単位は、おのおのニュアンスや濃淡があり、全体としてハーモニーをつくっている。対象的自然とは本来陰翳をもつものであり、「形態と精神の交流」という彼の思想が、色面のニュアンスとして、反映されているように思う。

これらの抽象的な絵画は、戦後開かれた国際展によって刺激を受け、若き日の情熱をもう一度よみがえら

№14「少女と貝殻」



せて、制作されたものである(註18)。幻想的な表現に向っていた彼の作風が、ここでもう一度原点にたちよえり、形態の追求に向けられている。彼の原点とは、滞仏中、ロートやレジェに学んで得た絵画理論であり、軌外の原理的立場は変っていない。写実を根底とした構成という、彼の方法に従って、より平面化され、より抽象化されているにすぎない。

軌外の作風は、19世紀的な写実から出発し、印象派を経てキュビスムを学び、シュルレアリスムやアブストラクトに接近するという風に、さながら近代美術史の縮図の観がある。キュビスム以後の時点においてキュビスムの絵画理論を学び、その基礎の上に、彼が吸収したそのいずれの典型的な様式とも少し違ったところに、独自の作風を樹立した。このような軌外は、わが国近代美術史における、かっこうの歴史の証言者といわなければなるまい。

註

註1　大正6年、第4回二科展に「静物」が初入選している。この作品は、所在不明。

註2　〈独立美術6〉川口軌外特輯、昭和8年、建設社、里見勝蔵「川口と僕」(P36)。

註3　〈中央美術№85〉二科・院展号。足立源一郎は「川口軌外氏の諸作はルノアールを泣かすにあのきたなさだけで充分である」(P48)と評し、川路柳虹は「ルノワール風の数点はいやにねばねばして不愉快だ。ルノワールの柔か味を真似ていながらその色の混濁のために凡ての画面を破壊している」(P77)というものだった。

註4　前掲〈独立美術6〉(P37)

註5　〈芸術新潮〉昭和27年6月号で、軌外はシャガールに会った時の思い出を語っている(P105)。その時期を軌外は1927年頃としているが、1926年(日付不明)の軌外宛の中山巍の葉書には、西村叡と3人でシャガールを訪問すべく日時、場所等を打合わせており、この時訪ねたとすれば1926年である。この時軌外は、シャガールが説いた幻想のリアリティという点に、強い印象を受けている。

註6　〈日本現代画家選12〉「川口軌外」昭和29年・美術出版社「古寺」作品解説

註7　前掲〈日本現代画家選12〉「マンドリン」作品解説

註8　黒田重太郎著〈構図の研究〉大正14年・中央美術社

註9　前掲〈構図の研究〉(P13)

註10　エドワード・フライ著、八重樫春樹訳〈キュビスム〉昭和48年・美術出版社　原典27　フェルナン・レジェ「絵画の起源とその再現的価値」

註11　前掲〈キュビスム〉原典32　フェルナン・レジェ「絵画における最近の成果」

註12　Guy Habasque (translated by Stuart Gilbert) 〈Cubism〉(「The taste of our time」by Skira) 1959. (P117)

註13　前掲〈日本現代画家選12〉「マンドリン」作品解説

註14　前掲　〈独立美術6〉里見勝蔵「川口と僕」(P39〜40)福沢一郎「川口軌外論」(P43〜45)

註15　前掲　〈独立美術6〉川口軌外「理智と無智」(P74)

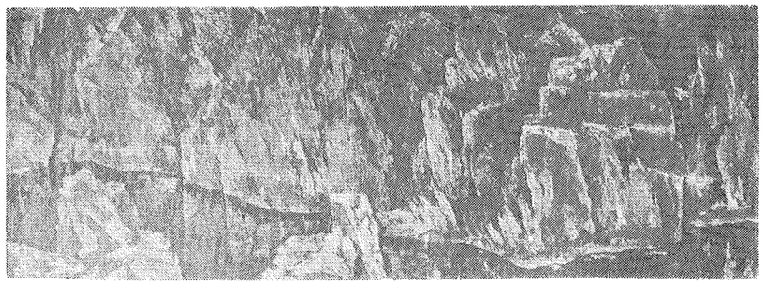
註16　〈独立美術15〉野口弥太郎特輯 昭和9年・建設社(P88)

註17　前掲　〈日本現代画家選12〉「日傘と人」作品解説

註18　同上

№15「陽炎」

№16「瀞峡」



○ 主要参考文献

〈画集〉

1　川口軌外画集　美術工芸会　昭和17年

2　日本現代画家選12　川口軌外　美術出版社　昭和29年

3　日本の名画7　洋画100選　三一書房　昭和41年

4　阿以田治修画集　美術工芸会　昭和8年

〈目録〉

5　二科会　第16回〜第17回二科画集

6　朝日新聞社　独立展集5〜13

7　朝日新聞社　独立美術10周年記念画集

8　独立美術協会　19独立展画集　1951・創立廿周年

9　毎日新聞社　1952日本国際美術展目録

10　毎日新聞社　第2回〜第7国日本国際美術展目録

11　毎日新聞社　第4回〜第8回現代日本美術展目録

12　国画会　第25回〜第31回国展目録

13　国画会　国画会40年の展望

14　川口軌外滞欧作品洋画展目録(和歌山商品陳列所)昭和5年

15　グワッシュ・油絵個展目録(大阪丸善)　昭和6年

16　神奈川県立近代美術館　川口軌外・脇田和展　昭和33年

17　Kigai 未発表作品展目録(壱番館画廊)　昭和40年

18　川口軌外遺作展目録(姫路画廊)　昭和47年

19　和歌山県立近代美術館 川口軌外展図録 昭和48年

20　京都市美術館　黒田重太郎遺作展図録　昭和46年

〈逐次刊行物〉

21　中央美術　№84　大正11年10月号

22　美之国　第6巻第2号　昭和5年2月号

23　アトリエ　第7巻第3号　昭和5年3月号。第12巻第3号〜第4号　昭和10年3月〜4月号

24　セレクト　第1巻第2号　昭和5年2月号

25　独立美術協会編　独立美術　2〜15　建設社

26　独立クロニック2(昭和7年11月5日)。11(昭和9年1月20日)。13(昭和9年4月30日)。15(昭和9年12月22日)

27　美術新論　№82　昭和8年8月号

28　美術　№7　昭和9年5月号。№32　昭和11年6月号

29　近代美術　第3巻第5号　昭和11年5月号

30　芸術研究会　洋画研究　第3巻7号　昭和11年10月10日

31　三彩　№192　昭和40年10月号

32　美術手帖　№155　昭和26年12月号。№271　昭和36年8月号

33　みづゑ　№300〜№301　昭和5年2月号〜3月号　№351　昭和9年5月号。№362　昭和11年6月号　№398　昭和13年4月号。№425　昭和15年4月号　№440　昭和16年7月号。№571　昭和28年3月号

34　芸術新潮　第3巻第6号　昭和27年6月号

35　増刊アサヒグラフ独立展号　昭和5年
　　独立展号　昭和7年

36　近代の美術3　日本の前衛美術　至文堂　昭和46年

〈単行本〉

37　外山卯三郎〈日本洋画の新世紀〉金星堂

38　黒田重太郎〈構図の研究〉中央美術社　大正14月

39　エドワード・フライ著八重樫春樹訳〈キュビスム〉美術出版社　昭和44年

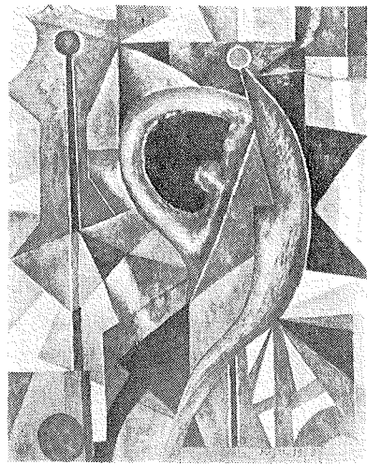
40　Maurice Raynal (translated by Stuart Gilbert) 〈Modern Painting〉Jeneva 1961

41　Robert Rosenblum 〈Cubism and Twentieth-Century Art〉New york 1966

42　Guy Habasque (translated by Stuart Gilbert) 〈Cubism〉(「Taste of our time」collection planned and directed by Albert Skira) Paris 1959

43　Patrick Waldberg (translated by stuart Gilbert) 〈Surrealism〉(「The taste of our time」by Skira) Paris 1962

№17「日傘と人」



1 主要行事

4月18日～5月6日	日本伝統工芸秀作展（日本伝統工芸秀作展実行委員会〔和歌山県教育委員会、和歌山県立近代美術館、社団法人日本工芸会〕主催）
5月6日	和歌山県美術家協会理事会ならびに昭和48年度定期総会
5月12日	第11回県美術家協会展運営委員会
5月27日	和歌山県立近代美術館友の会理事会ならびに昭和48年度定期評議員会
6月14日～6月25日	第11回県美術家協会展（県美術家協会と共催／第1期━14日～18日〈日本画、工芸、書、生花〉第2期═21日～25日〈洋画、彫塑、写真、現代造形〉）
6月23日	第6回和歌山県立近代美術館協議会
6月28日～6月30日	「熊野三山めぐり」美術鑑賞バスツアー（県立近代美術館友の会主催）
6月28日～7月2日	和歌山市「春の学校美術展」（和歌山市美育協会と共催）
7月12日～8月20日	昭和48年度前期・県立近代美術館常設企画展
7月20日	第27回和歌山県美術展（県展）主催者会議
8月8日～8月12日	第8回県立近代美術館友の会展（県立近代美術館友の会と共催）
9月12日～9月16日	第6回和歌山県勤労者美術展（和歌山県と共催／日本画、洋画、彫塑、工芸、書、写真、生花）
10月4日～10月8日	昭和48年度県下高校総合芸術祭美術展（和歌山県高等学校芸術科教育連盟と共催）
10月13日～11月4日	川口軌外展
11月17日～12月3日	第27回県展（県教育委員会、毎日新聞和歌山支局と共催／第1期═17日～21日〈日本画、書、生花〉第2期═23日～27日〈洋画、彫塑〉第3期═29日～12月3日（工芸、写真、現代造形）
12月15日～12月17日	第27回県展新宮地方展（新宮市教育委員会が共催に加わる／各部門選抜［除生花］）
1月6日～3月31日	昭和48年度後期・県立近代美術館常設企画展
1月24日	第7回県立近代美術館協議会
2月20日～2月24日	第7回県立近代美術館友の会習作展（県立近代美術館友の会と共催）
2月28日～3月4日	第1回移動美術館「和歌山の作家展」／田辺展（田辺市教育委員会と共催）
3月7日～3月11日	第1回移動美術館「和歌山の作家展」／新宮展（新宮市教育委員会と共催）
3月28日～4月1日	第34回国際写真サロン入選作品展（朝日新聞社・全日本写真連盟と共催）

2 主催展覧会（企画展）

「日本伝統工芸秀作展」

会期　4月18日～5月6日（入場者数 1,270人）
主催　日本伝統工芸秀作展和歌山会場実行委員会（和歌山県教育委員会、和歌山県立近代美術館、日本工芸会）
後援　文化庁、和歌山県美術家協会、和歌山県立近代美術館友の会

わが国には世界に卓絶する工芸の伝統があり、その種類も豊富で、技術的にも高度の発達を示している。この展覧会は、ひろくわが国の伝統的な工芸のよさを紹介し、無形文化財の保護育成に資するために、日本伝統工芸展その他の展覧会に出品された作品のうち、特に優秀なものを集めて展示し、伝統を現在に生かす努力を重ねてきた成果を問うものである。

出品目録

No.	作品名	作者	生年	住所等
Ⅰ 陶芸				
1	志野練上手茶碗	荒川豊蔵	明27	岐阜県多治見市大畑4、保持者
2	瀬戸黒茶碗	〃	〃	〃
3	志野水指	〃	〃	〃
4	色鍋島うつぎ文大皿	今泉今右衛門	明30	佐賀県西松浦郡有田町赤絵町1590、総合指定保持者
5	色鍋島笹輪文鉢	今泉善詔	大15	〃
6	青磁深鉢	宇野宗甕	明21	京都市東山区泉涌寺東林町37、記録選択
7	灰釉花器	江崎一生	大7	愛知県常滑市高取23—20
8	白磁輪花鉢	奥川忠右衛門	明34	佐賀県西松浦郡有田町2473、記録選択
9	油滴天目大鉢	加藤幸兵衛	明26	岐阜県多治見市市之倉町4—115
10	灰釉鉦鉢	加守田章二	昭8	栃木県益子町道祖上
11	祥端共蓋壷	川瀬竹春	明27	京都市東山区五条橋東5丁目470、記録選択
12	白ふち釉描天目釉大皿	木村盛和	大10	京都市東山区山科清水焼団地町10—1
13	古上野釉平鉢	高鶴　元	昭13	福岡県粕屋郡久山町猪野765
14	五剣山釉裏紅染付壷	近藤悠三	明35	京都市東山区山科西野山岩ケ谷18—2
15	柿右衛門濁手牡丹椿文壷	酒井田柿右衛門	明39	佐賀県西松浦郡有田町西部丁352、総合指定保持者
16	柿釉壷	清水卯一	大15	京都市東山区五条橋5—477
17	鉄釉流描梅文楕円鉢	田村耕一	大7	栃木県佐野市久保町112
18	白磁鉢	塚本快示	大元	岐阜県土岐市駄知町
19	黄唐津叩き壷	中里無庵	明28	佐賀県唐津市町田1312—1、記録選択
20	柿釉丸文大平鉢	浜田庄司	明27	栃木県芳賀郡益子町益子3387、保持者
21	白釉黒掛方壷	〃	〃	〃
22	地掛鉄絵草文茶碗	〃	〃	〃
23	備前大徳利型壷	藤原　啓	明32	岡山県備前市穂浪536、保持者
24	萩焼茶碗	三輪休和	明28	山口県萩市椿東船津2363—2、保持者
25	木葉天目茶碗	石黒宗麿		（死去）
26	彩瓷壷	〃		〃
27	葆光釉彩磁花弁文化瓶	板谷波山		〃
28	氷華磁葡萄文化瓶	〃		〃
29	青白磁鳥獣浮文鉢	加藤土師萌		〃
30	緑地釉裏金彩飾壷	〃		〃
31	備前花生	金重陶陽		〃
32	白地草花絵扁壷	河井寛次郎		〃
33	織部俎板盤	北大路魯山人		〃
34	色絵金銀彩羊歯文小箱	富本憲吉		〃

35	染付色絵金銀彩大飾皿	富本憲吉		（死去）

Ⅱ 染　織

36	蠟纈着物「園」	伊藤　倭	昭16	福岡市西区高取 2—11—5
37	絞染縞文訪問着「虫の音」	小倉建亮	明30	京都市中京区釜座御池上ル下松尾町
38	印金朧型梅花文着物	鎌倉芳太郎	明31	東京都中野区沼袋 2 丁目29—2、保持者
39	唐織牡丹文打掛	喜多川平朗	明31	京都市北区小山中溝町19、保持者
40	友禅梅文訪問着	木村雨山	明24	石川県金沢市横山町22—5、保持者
41	精好仙台平「仙霊の滝」	甲田栄佑	明35	（死去）
42	佐賀錦ハンドバック	古賀フミ	昭 2	東京都文京区小日向 2—25—8
43	江戸小紋蔦文着物	小宮康孝	大14	東京都葛飾区西新小岩 3 丁目 7—4
44	木版染訪問着「やま」	小山保家	明36	東京都千代田区神田司町2—14
45	長板中形網代小松文浴衣	清水幸太郎	明30	東京都葛飾区四ツ木4丁目29—1、保持者
46	紬織着物「澤」	志村ふくみ	大13	京都市右京区嵯峨釈迦堂門前南中院町16
47	型絵染着物「夜香文」	附田照次	大 5	佐賀県鹿島市能古見辻
48	芭蕉布型絵染布地文部屋着	芹沢銈介	明28	東京都大田区西蒲田4—20—15、保持者
49	型絵染着物「小川紙漉」	〃	〃	〃
50	友禅訪問着「揺影」	田島比呂子	大11	神奈川県藤沢市鵠沼海岸 2—17—1—413
51	芭蕉布絣着物	平良敏子	大10	沖縄県大宜味村字喜如嘉782
52	友禅訪問着「映光」	森口華弘	明42	京都市中京区小川通二条下ル古城町353、保持者
53	紬織着物「待春」	宗広力三	大13	岐阜県郡上八幡町初音2508
54	友禅訪問着「麦」	山田　貢	明45	東京都世田谷区大原 1—27—2
55	藍地双子縞上布	小千谷縮布・越後上布技術保存会		新潟県小千谷市大字土川94、総合指定
56	浅黄地藍格子縮	〃		〃
57	久留米絣	久留米絣保存会		福岡県久留米市両替町1、久留米市教育委員会内
58	〃	〃		〃
59	平結城蚊絣単衣	結城紬技術保存会		茨城県結城市結城1447結城市役所内、総合指定
60	有松鳴海絞浴衣「みどり絞」	愛知県絞技術保存会		名古屋市緑区有松町、有松絞商工協同組合内、記録選択

Ⅲ 漆　芸

61	枠造朱溜金彩重	赤地友哉	明39	神奈川県横浜市港北区太尾町2115
62	七宝文きんま色紙箱	伊賀三景	明45	香川県高松市番町 3—10—17
63	きんま竜鳳凰文八角香盆	磯井如真	明16	（死去）
64	きんまかげろう盆	磯井正美	大15	香川県高松市西京町 3—4—15
65	金銀平文箱「朝」	大場松魚	大 5	石川県金沢市森山 1—22—14
66	乾漆香盆	奥出寿泉	大 5	石川県小松市那谷町 7—101
67	彫漆薺文茶入	音丸耕堂	明31	東京都文京区向丘 1—12—5、保持者
68	堆漆金連糸盆	音丸　淳	昭 4	〃
69	漆皮草花八角飾箱	新村撰吉	明40	東京都中野区沼袋 3—9—9
70	木地蒔絵牡丹文手箱	高野松山	明22	東京都文京区白山 4—7—4、保持者
71	蒔絵飾箱「月食」	田口善国	大12	埼玉県上尾市大字久保387—3
72	乾漆六角鉢	田所芳哉	大 1	東京都目黒区緑ケ丘 3—10—30
73	卵殻花の図箱	砺波宗斉	大 7	石川県金沢市森山1—17—20
74	籃胎きんま香盆	佐々木文夫	大13	香川県高松市円座町108—1
75	片切沈金彫飾箱	藤井観文	明21	東京都豊島区長崎 5—19—13
76	沈金芒絵飾箱	前　大峰	明32	石川県輪島市河井町一部136、保持者
77	乾漆梅花喰籠	増村益城	明43	東京都豊島区千早町 2 —24
78	蒔絵松文箱	松田權六	明29	東京都文京区千石町 4—25—2 、保持者
79	蒔絵玉すだれ文盤	松田權六	明29	東京都文京区千石町 4—25—2 、保持者

Ⅳ 金　工

80	鍛鉄うずら置物	井尾敏雄	明41	東京都世田谷区上馬町 5—16—26
81	金具「汀」	大木秀春		（死去）
82	独楽釜	角谷一圭	明37	大阪市東成区深江南 3—15—20
83	萩の野彫金壷	桂　盛行	大 3	東京都練馬区中村北 2—5
84	青銅回文菱形花器	香取正彦	明32	東京都目黒区南 1—13—3
85	砂張水指	金岡宗幸	明43	石川県金沢市長土堀 1—1—27
86	水禽文水滴	鹿島一谷	明31	東京都台東区池ノ端 4—14 · 6
87	銀打出斜交線水指	関谷四郎	明40	東京都板橋区大谷口 2—41
88	朱銅花器「繭」	高村豊周		（死去）
89	金彩流線文壷	内藤四郎	明40	埼玉県浦和市常盤 7—13—7
90	筋文釜	長野埜志	明32	東京都北区上十条 3—9—3、保持者
91	沢瀉文棗釜	〃	〃	〃
92	金彩銀壷「秋のすその」	増田三男	明42	埼玉県浦和市中尾不動谷206
93	鋳銅線刻花瓶	渡辺　正	大12	東京都北区西ケ原 4—15—12

Ⅴ 木竹工

94	老松彫抜手鉢	太田芝山	明32	岡山県岡山市津山区東松原町川崎657—2
95	欅造大盆	川北浩一	昭 9	石川県江沼郡山中町上原
96	栃杢拭漆手箱	黒田辰秋	明37	京都市東山区清水 4 丁目西町148、保持者
97	紫竹籠花籠	生野祥雲斉	明37	大分市白木549、保持者
98	桐八稜盆	氷見晃堂	明39	石川県金沢市本町 2—8—16、保持者
99	竹千筋組上飾箱	松沢一義	昭 6	東京都台東区千束 2—28—7

Ⅵ 人　形

100	紙塑人形「延寿雛」	鹿児島寿蔵	明31	東京都練馬区豊玉上1—24、保持者
101	衣裳人形「流れ」	平田郷陽	明36	東京都台東区上野桜木 1—1508、保持者
102	衣裳人形「元宵観灯」	堀　柳女	明30	東京都品川区東五反田 5—9—25、保持者

Ⅶ ガラス

103	青ガラス茶碗「大空」	岩田藤七	明26	東京都新宿区弁天町80、芸術院会員
104	ガラス飛文平茶碗	〃	〃	〃

「日本伝統工芸秀作展」会場風景

「昭和48年度前期／県立近代美術館常設企画展」

会期　7月12日～8月20日（毎週火曜日休館）

このたび、小出楢重のスケッチ17点、石垣栄太郎のデッザン200点を所蔵することになり、この種のコレクションが増加したので、これまでに収集した野長瀬晩花、原勝四郎のデッザン等を加えて、展観しようとするものである。

出品目録

№.	作　者	作品題名	寸　法	材質・形状	制作年代
1	野長瀬晩花	婦人像	18.0×10.7	淡彩・デッザン	大正11年（1922）
2	〃	裸　婦	44.0×29.0	鉛筆・デッザン	〃
3	〃	裸　婦	42.5×19.5	〃	〃
4	〃	踊る女	19.0×10.3	淡彩	〃
5	小出楢重	近江湖畔風景	13.9×19.8	インク・スケッチ	昭和3年（1928）
6	〃	〃	〃	〃	〃
7	〃	〃	〃	〃	〃
8	〃	〃	〃	〃	〃
9	〃	〃	〃	〃	〃
10	〃	〃	〃	〃	〃
11	〃	〃	〃	〃	〃
12	〃	〃	〃	〃	〃
13	〃	〃	15.9×20.2	〃	〃
14	〃	淡路風景	13.9×19.8	鉛筆・スケッチ	昭和4年（1929）
15	〃	〃	〃	インク・スケッチ	〃
16	〃	〃	〃	〃	〃
17	〃	〃	〃	鉛筆・スケッチ	〃
18	〃	〃	〃	〃	〃
19	〃	〃	〃	インク・スケッチ	〃
20	〃	〃	〃	鉛筆・スケッチ	〃
21	〃	〃	〃	〃	〃
22	石垣栄太郎	裸　婦	36.0×43.0	鉛筆・デッザン	
23	〃	男の半身	40.0×32.5	〃	
24	原勝四郎	自画像	22.0×17.3	インク・デッザン	大正7年頃(1918頃)
25	〃	裸　婦	25.5×19.5	鉛筆・デッザン	大正10年頃(1921頃)
26	〃	裸　婦	25.5×19.5	〃	〃
27	〃	少女像	37.0×28.0	墨	昭和20年頃(1945頃)
28	〃	自画像	34.0×27.0	鉛筆・デッザン	昭和35年頃(1960頃)

野長瀬晩花「婦人像」

「川 口 軌 外 展」

会期　10月13日～11月4日（入場者数 3,833人）

主催　和歌山県立近代美術館

後援　和歌山県美術家協会 吉備町 有田地方教育委員会連絡協議会 有田地方美育協会 和歌山県立近代美術館友の会

近代日本美術の展開の中で、すぐれた業績をのこした本県出身の作家をとりあげ、その芸術の全貌を探り、再評価の前提にしようという試みは、郷土作家シリーズと名づけ、本館の重要な事業として、継続して実施してきた。今回はその一環として、川口軌外をとりあげた。

川口軌外は、明治25年（1892）和歌山県有田郡吉備町（旧御霊村）に生まれ、和歌山師範学校を中途退学して、太平洋画会や日本美術院の研究所で油絵を学んだ。大正8年～12年（1919～23）、大正13年～昭和4年（1924～29）の2度渡仏し、里見勝蔵、佐伯祐三、前田寛治、小島善太郎らと交友、はじめはルノアールの影響をうけ、やがてロートやレジェに師事し、シャガールに学んだ。帰国後、二科会友から独立美術協会の創立に加わり、戦後は国画会に所属したが、立体派の系譜に連なる構成的作風によって、わが国近代美術界に独自の位置を占めている。戦前には「少女と貝殻」のような幻想的な作品があり、戦後には「円」「日傘と人」のような抽象画を描き、終始前衛的な創作態度を維持したのは、周知のとおりである。

本展覧会は、初期から晩年に至るまで、習作を含めて、軌外芸術の展開の様相を跡づけようとするものであったが油絵、グワッシュ、デッサン等、180余点の作品を展観することによって、その意図は、可成りの程度に達せられたように思う。ただ「蓮」「牡丹」という、戦前の代表作のいくつかが失なわれ、軌外の芸術の重要な一面を充分再現できなかったのは残念であった。

出品目録

№.	作　品　題　名	材質・形状	大きさ	制作年	出品展
1	裸　　婦	油彩キャンバス	63.3× 79.0	1917	
2	顔	油彩・板	22.4× 15.4	1918	
3	雪　　景	油彩キャンバス	50.5× 60.0	1918	
4	模写（ティントレット「スザンヌ・オーバン」）	〃	97.0×145.9	1920～3	
5	模写（ティツィアーノ「ヴィーナス」）	〃	93.5×138.4	1920～3	
6	静　　物	〃	45.0× 53.5	1920～3	第9回二科展
7	少　　女	〃	64.2× 53.5	1920～3	
8	裸　　婦	〃	80.4× 64.5	1920～3	
9	本を読む女	〃	45.5× 53.2	1920～3	
10	風　　景	〃	45.5× 54.4	1920～3	
11	風　　景	〃	53.0× 46.5	1920～3	
12	バ　　ラ	〃	45.5× 53.5	1920～3	
13	婦 人 像	〃	59.8× 49.0	1920～3	
14	模写（ルノアール「鏡に向うガブリエル」）	〃	80.5× 65.5	1920～3	
15	少女とミモザの花	〃	91.0× 73.0	1920～3	第9回二科展
16	地球儀のある静物	〃	59.8× 72.3	1920～4	
17	キャベツのある静物	〃	72.2× 52.5	1920～4	
18	パ リ 風 景	〃	64.4× 79.6	1924	
19	風　　景	〃	64.7× 79.7	1924頃	
20	本を読む裸婦	〃	80.0× 64.5	1925	
21	静　　物	〃	53.0× 45.5	1925	
22	立てる裸婦	〃	90.0× 59.6	1925	
23	水差しのある静物	〃	59.3× 72.0	1925	
24	風　　景	〃	65.0× 80.5	1925頃	
25	裸婦群像	〃	87.3× 94.5	1925頃	
26	洋梨と葡萄の静物	〃	32.5× 54.5	1923～5	
27	ワインのある静物	〃	38.0× 61.2	1925	

28	洸	油彩キャンバス	72.3× 54.2	1925頃	
29	風景―モントバン	〃	90.0× 71.6	1926	第16回二科展
30	鮭のある静物	〃	49.5× 60.0	1924～6	
31	静　　物	〃	53.9× 72.3	1924～6	
32	窓辺の静物	〃	74.9× 64.7	1924～6	
33	風　景　Ⅱ	〃	72.5× 59.2	1924～7	第16回二科展
34	風　　景	〃	59.2× 72.4	1924～7	
35	椅子による裸婦	〃	91.0× 72.5	1926頃	
36	仰臥裸婦	〃	59.5× 80.0	1926頃	
37	少女と子供	〃	80.5× 59.0	1926頃	
38	崖のみえる海岸	〃	53.5× 65.0	1926頃	
39	ウニとカキ	〃	37.5× 60.0	1924～7	
40	グラスと水差のある静物	〃	72.3× 60.0	1925～7	
41	写　　像	〃	116.0× 88.3	1927	
42	静　　物	〃	54.0× 45.0	1927～9	
43	果物籠のある静物	〃	72.5× 59.6	1927～9	1930年協会展第５回
44	寺　　院	〃	64.0× 79.5	1927	第16回二科展
45	仏国アーブル港	油彩・板	26.8× 35.5	1927	
46	仏国アーブル港	〃	27.0× 35.0	1927	
47	座する女	油彩キャンバス	116.6× 72.7	1927	
48	キャフェにて	〃	79.0× 64.0	1927	第16回二科展
49	画家の肖像	〃	80.5× 60.0	1926～7	
50	寺　　院	〃	64.5× 53.5	1927～8	
51	老　　人	〃	114.4× 71.1	1927～8	1930年協会展第５回
52	サーカス	〃	117.0× 81.0	1927～8	1930年協会展第５回
53	魚　　商	〃	91.0× 72.5	1927～8	
54	ボヘミアン	〃	130.0× 96.0	1928	1930年協会展第５回
55	裸　　婦	〃	91.5× 73.0	1927～9	
56	臥す女	〃	81.0×110.0	1927～9	1930年協会展第５回
57	エグリーズ	〃	54.6× 45.9	1928	
58	バナナのある静物	〃	90.4× 72.3	1928	
59	車のある風景	〃	73.4×116.5	1928	第16回二科展
60	風	〃	92.0× 65.0	1927～9	
61	サーカス	〃	80.3× 65.1	1929	
62	黄　　壁	〃	59.2× 72.3	1927～8	第１回独立美術協会展
63	月空下絵	〃	72.6× 91.0	1930	
64	地　　維	〃	193.5×154.5	1932	第２回独立美術協会展
65	スブニール	〃	116.5× 80.4	1932	第２回独立美術協会展
66	静　　物	〃	115.1× 78.7	1932	第２回独立美術協会展
67	陽　　炎	〃	115.7× 71.8	1932	第２回独立美術協会展
68	花	〃	115.0× 88.8	1932	
69	コンポジション	〃	53.0× 45.5	1932	
70	花　　束	〃	130.×242.4	1933	第３回独立美術協会展
71	月夜の雪景	〃	92.2× 65.2	1933	第３回独立美術協会展
72	無花果	〃	38.0× 61.2	1933	
73	柘　　榴	〃	27.1× 48.0	1933	
74	花	〃	81.0× 64.5	1933頃	
75	花	〃	80.5× 62.0	1933頃	
76	瀞　　峡	〃	89.5×241.0	1934	第４回独立美術協会展

77	少女と貝殻	油彩キャンバス	159.0×266.6	1934	第４回独立美術協会展
78	花	〃	73.2× 60.6	1934	
79	花	〃	80.0× 59.2	1932～4	
80	静　　物	〃	38.0× 72.5	1934頃	
81	貝　　殻	〃	65.7×103.0	1935	第５回独立美術協会展
82	無　　題	〃	160.5×112.0	1935	第５回独立美術協会展
83	花	〃	45.6× 38.5	1933～5	
84	蝶	〃	37.5× 45.5	1935頃	
85	貝	〃	37.0× 45.0	1935頃	
86	蓮	〃	40.9× 53.0	1935	
87	桃	〃	33.2× 53.0	1935頃	
88	あじさい	〃	31.6× 40.9	1935頃	
89	アマリリス	〃	60.8× 38 0	1935頃	
90	貝　　殻	〃	81.0×116.0	1936	第６回独立美術協会展
91	静　　物	〃	38.2× 45.0	1936頃	
92	エスキースB	〃	161.5×130.5	1937	第７回独立美術協会展
93	少女と子供	〃	116.0× 91.0	1937	
94	蝸　　牛	〃	50.3× 60.6	1937	
95	静　　物	〃	23 9× 33.8	1937頃	
96	鳥と少女	〃	117.0× 91.2	1937頃	
97	花と少女	〃	110.7× 91.0	1938	第10回独立美術協会展
98	二　　婦	〃	161.5×130.0	1939	第10回独立美術協会展
99	潮　　岬	〃	45.3× 55.3	1939頃	
100	魚　　商	〃	116.3× 91.0	1939頃	
101	静　　物	〃	37.2× 45.0	1939頃	
102	花と女	〃	72.8× 61.0	1938	第10回独立美術協会展
103	薫い花	〃	73.2× 60.6	1938頃	
104	夏の海	〃	166.0×266.5	1940	第10回独立美術協会展
105	熊野灘	〃	161.0×129.8	1940	紀元2600年奉祝展
106	牡　　丹	〃	37.5× 45.5	1940頃	
107	柘　　榴	〃	49.5× 60.0	1941頃	
108	牡　　丹	〃	116.2× 73.0	1941頃	
109	百　　合	〃	60.5× 50.0	1941頃	
110	静　　物	〃	37.5× 45.5	1941頃	
111	かぼちゃのある静物	〃	39.6× 73.0	1942頃	
112	静　　物	〃	37.5× 45.2	1942頃	
113	ひまわり	〃	72.9× 91 0	1943	第13回独立美術協会展
114	橋杭岩	〃	45.0× 53.0	1942頃	
115	群　　像	〃	116.5× 73.0	1941	
116	静　　物	〃	40.7× 53.2	1945～50	
117	静　　物	〃	45.3× 52.9	1945～50	
118	光	〃	115.0× 80.0	1950	第24回国画会展
119	月	〃	131.0×162.5	1951	第25回国画会展
120	花	〃	79.3× 64.0	1947～50	
121	花	〃	98.9× 71.6	1952	第26回国画会展
122	鳥の情態	〃	129.0× 88.0	1952	第１回日本国際美術展
123	静　　物	〃	90.2× 71.8	1952	第１回日本国際美術展 第２回サンパウロ・ビエンナーレ展
124	群　　像	〃	99.0× 65.0	1953	第27回国画会展 第２回サンパウロ・ビエンナーレ展

125	異　　影	油彩キャンバス	91.0× 61.0	1953	第27回国画会展
126	日傘と人	〃	119.5× 89.6	1953	第2回日本国際美術展
127	Composition	〃	116.7× 86.2	1953	第2回日本国際美術展 第2回サンパウロ・ビエンナーレ展
128	製油所と船	〃	99.0× 72.0	1953	第27回国画会展
129	円	〃	100.0× 80.3	1954	第1回現代日本美術展
130	製油所の港	〃	115 6× 79.5	1954	第1回現代日本美術展
131	作　品　B	〃	89.6× 71.2	1955	第29回国画会展
132	作　品　C	〃	99.5× 72.2	1955	第29回国画会展
133	水浴する人達	〃	116.2× 81.0	1955	第3回日本国際美術展
134	夏の浜にて	〃	115.1× 89.9	1955	第3回日本国際美術展
135	作　　品	〃	80.0× 64.4	1955	日米抽象美術展
136	群　　像	〃	116.0× 79.5	1956	第30回国画会展
137	構　　図	〃	116.0× 79 5	1956	第30回国画会展
138	集　　団	〃	160.0×112.0	1956	第2回現代日本美術展
139	人　　体	〃	73.2× 60 8	1956	
140	人　　体	〃	129.4× 88.2	1957	第4回日本国際美術展
141	鳥　と　樹	〃	90.0×115.5	1958	第31回国画会展
142	樹間と鳥	〃	193.0×130.0	1958	第3回現代日本美術展
143	三つのポーズ	〃	160.0×129.5	1959	第5回日本国際美術展
144	水浴の人々	〃	115.0× 79.0	1960	第4回現代日本美術展
145	作　　品	〃	162.0×130 0	1961	第6回日本国際美術展
146	顔のある木	〃	115 0× 78 5	1962	第5回現代日米美術展
147	百合花と女	〃	65.0× 53.0	1962	
148	鳥	〃	161.2×129.5	1963	第7回日本国際美術展
149	森　の　中	〃	116.0× 95.7	1964	第6回現代日本美術展
150	風　　景	グワッシュ	33.4× 51.4	1924～ 8	
151	自　画　像	〃	51.4× 33.3	1924～30	
152	失　　題	〃	24.6× 32.4	1927～ 9	
153	ライオンと犬	〃	25.8× 32.8	1927～ 9	
154	サーカス	〃	25.8× 32.8	1927～ 9	
155	魚を売る婦	〃	32.8× 48.2	1927～ 8	
156	寺　　院	〃	32.2× 25.7	1927～30	
157	サーカス	〃	32.8× 25 7	1927～ 8	
158	か　ま　ど	〃	49.7× 65.0	1927～30	
159	失　　題	〃	49.8× 65.0	1927～ 8	
160	牛	〃	51.5× 66.2	1927～30	
161	母　と　子	〃	65.3× 50.2	1927～30	
162	ひまわり	〃	65.0× 49.8	1930～35	
163	魚　　商	〃	33.0× 50.0	1930～35	
164	失　　題	〃	32.0× 51.5	1930～35	
165	寺　　院	〃	47.5× 29.0	1951	
166	円	〃	65.0× 44.7	1952	
167	作　　品	〃	63.5× 43.0	1954	
168	裸婦群像	パステル	46.5× 52.0	1925	
169	静　　物	〃	27.1× 38.6	1945～50	
170	作　　品	〃	38.7× 27.8	1950頃	
171	静　　物	〃	33.3× 25.8	1952頃	
172～187	デッサン	[木炭・コンテ・ペン・淡彩等各種15点]			

「昭和48年度後期／県立近代美術館常設企画展」

会期　49年1月6日～3月31日（毎週火曜日休館）

館蔵品を主体とする石垣栄太郎、川口軌外、国枝金三、ヘンリー杉本、高井貞二、野長瀬晩花、原勝四郎、保田竜門、吉田政次の絵画（油絵、日本画、版画）

出品目録

No.	作　者	作品題名	寸　法	材質・形状	制作年代
1	石垣栄太郎	自画像	41.0× 32.0	油彩・キャンバス	大正6年（1917）
2	〃	キューバ島の反乱	181.0×149.0	〃	昭和8年（1933）
3	〃	バーゲンセール	56.0× 72.0	〃	〃 22年（1947）
4	川口軌外	少　女	64.2× 53.5	〃	大正9～12年（1920～23）
5	〃	写　像	116.0× 88.3	〃	昭和2年（1927）
6	〃	車のある風景	73.4×116.5	〃	〃 3年（1928）
7	〃	月空下絵	72.6× 91.0	〃	〃 5年（1930）
8	〃	貝　殻	65.7×103.0	〃	〃 11年（1936）
9	〃	人　体	129.4× 88.2	〃	〃 32年（1957）
10	国枝金三	卓上静物	60.6× 72.7	〃	大正9年（1919）
11	〃	麗　日	90.8× 72.2	〃	昭和14年（1939）
12	ヘンリー杉本	信仰・愛・希望	162.0×130.0	〃	〃 41年（1966）
13	〃	テナメント・イン・ニューヨーク	162.0×130.0	〃	〃 40年（1965）
14	〃	モレー洗濯場	90.0× 70.0	〃	〃 39年（1964）
15	高井貞二	スリー・サークル	131.5×176.5	〃	〃 42年（1967）
16	〃	作　品	137.0×132.0	〃	〃 37年（1962）
17	原勝四郎	裸　婦	72.7× 60.6	油彩・ボール紙	〃 5年（1930）
18	〃	瀬戸風景	65.1× 53.0	〃	〃 10年（1935）
19	〃	道　化	90.0× 73.0	〃	〃 16年（1941）
20	〃	婦人像	72.5× 60.4	〃	〃 28年（1953）
21	保田竜門	老婦人像	66.5× 44.5	油彩・キャンバス	大正10～12年（1921～23）
22	〃	裸婦群像	130.5×194.0	〃	〃 15年（1926）
23	吉田政次	相対性絵画No.5	157.0×157.0	木版・二曲屏風	昭和34年（1959）
24	野長瀬晩花	被布きたる少女	114.0×134.0	絹本・着彩	明治44年（1911）
25	〃	夕陽に帰る漁夫・画稿	102.5×127.5	紙本・淡彩	大正9年（1920）
26	〃	五月の庭	77.0×137.5	紙本・着彩	昭和31年（1956）

原勝四郎［瀬戸風景］

第１回移動美術館「和歌山の作家展」

田辺展　会期49年２月28日～３月４日　／　会場　紀州信用金庫田辺東支店大会議室
新宮展　会期49年３月７日～３月11日　／　会場　新宮市民会館小ホール
主催　和歌山県立近代美術館　田辺市教育委員会（田辺展）　新宮市教育委員会（新宮展）
後援　田辺市（田辺展）　新宮市（新宮展）　和歌山県美術家協会　和歌山県立近代美術館友の会

本館には分館が設置されておらず、本県の地理的状況からみて、広く普及の徹底をはかることはむつかしい現状である。そこで、館所蔵作品を地方において展観して美術館活動を行ない、もって県民の美術に関する愛好心を高めようとするものである。

出品目録

No.	作　者	作品題名	寸　法	材質・形状	制作年代
	［日本画］				
1	野長瀬晩花	スペインの田舎の子供	136.0×110.0	寒冷紗本・着色	大正13年（1924）
2	日高昌克	山峡池畔図	44.0× 56.0	紙本・水墨	昭和30年（1955）
	［油　彩］				
3	石垣栄太郎	女の顔	26.0× 20.0	油彩・キャンバス	大正５年（1916）
4	〃	街	122.0× 90.0	〃	〃 14年（1925）
5	〃	スケッチ・クラス	56.0× 72.0	〃	昭和22年（1947）
6	川口軌外	風　景	64.7× 79.7	〃	大正13年頃（1924頃）
7	〃	裸　婦	91.5× 73.0	〃	昭和２～４年（1927～29）
8	〃	花	115.0× 88.8	〃	〃 ７年（1932）
9	〃	光	115.0× 80.0	〃	〃 25年（1950）
10	〃	港	115.0× 79.0	〃	〃 32年（1957）
11	ヘンリー杉本	カーメルハイランド海辺	79.0× 99.0	〃	〃 12年（1937）
12	〃	ロンギング	162.0×130.0	〃	〃 43年（1968）
13	〃	秋のパリ	140.0×130.0	〃	〃 40年（1965）
14	高井貞二	金と銀	188.0×178.5	〃	〃 37年（1962）
15	〃	赤い糸	194.0× 73.0	〃	〃 42年（1967）
16	原勝四郎	画工像	65.0× 53.0	油彩・ボール紙	〃 ７年（1932）
17	〃	小　湾	70.0× 82.0	〃	〃 15年（1940）
18	〃	バ　ラ	53.0× 45.0	油彩・ベニヤ板	〃 31年頃（1956頃）
19	保田竜門	村の娘	83.0× 67.5	油彩・キャンバス	大正４年（1915）
20	〃	読　書	65.0× 53.0	〃	〃 10～12年（1921～23）
21	〃	裸婦立像	81.0× 65.0	〃	〃 10～12年（1921～23）
	［版　画］				
22	浜口陽三	毛糸とトリコット	24.3× 51.9	メゾチント	昭和40年（1965）
23	〃	赤い鉢とサクランボ	47.0× 62.0	〃	〃 35年（1960）
24	〃	カレイとブドウ	29.3× 39.0	〃	〃 32年（1957）
25	〃	19と１つのサクランボ	23.2× 53.2	〃	〃 40年（1965）
26	〃	ざくろ	29.2× 44.0	〃	〃 40年（1960）
27	保田春彦	作　品	56.5× 38.4	シルクスクリーン	〃 46年（1971）
28	〃	作　品	56.5× 38.4	〃	〃 46年（1971）
29	吉田政次	わが宇宙No.Ⅰ	213.0×216.0	木版・２曲屏風	〃 40年（1965）
	［彫　刻］				
30	建畠大夢	おゆのつかれ	像高 67.0	ブロンズ	大正２年（1914）
31	〃	恩師の顔	〃 37.0	〃	昭和14年（1939）
32	保田竜門	アンドレの首	〃 19.0	〃	大正10～12年（1921～23）
33	〃	仰臥女	〃 15.0	〃	昭和23年（1948）
34	〃	鳩をもつ女	〃 81.0	〃	〃 23年（1948）

3 共 催 展 覧 会

「第11回県美術家協会展」
和歌山県美術家協会員による総合美術展

会期　第１期＝６月14日～18日（日本画、工芸、書、生花）第２期＝６月21日～25日（洋画、彫塑、写真、現代造形）
主催　和歌山県美術家協会　和歌山県立近代美術館　／　**後援**　朝日新聞社和歌山支局　和歌山県立近代美術館友の会

昭和48年度「春の学校美術展」

和歌山市内各小学校、中学校、高等学校、幼稚園の児童生徒の写生画展
会期　６月28日～７月２日（大展示室）／　**主催**　和歌山県美育協会　和歌山県立近代美術館

「第８回近代美術館友の会展」

友の会活動の一環として行なうアマチュア美術展（日本画、洋画、工芸、書、写真、生花など）
会期　８月８日～12日（一般、中、小展示室）
主催　和歌山県立近代美術館友の会　和歌山県立近代美術館　／　**後援**　和歌山県美術家協会

「第６回和歌山県勤労者美術展」

勤労の余暇に制作した美術作品を展示し、本県勤労者の美的素養を培う公募展
会期　９月12日～17日（日本画、洋画、彫塑、工芸、書、写真、生花）
主催　和歌山県　和歌山県立近代美術館　／　**後援**　和歌山県美術家協会　和歌山県労働者福祉協議会　和歌山県経営者協会

昭和48年度「県高校総合芸術祭美術展」

県下の各高等学校が参加して開催する芸術祭行事の美術展部門（48年度県民文化祭参加）
会期　10月４日～８日（一般、中、小展示室）／　**主催**　和歌山県高等学校芸術科教育連盟　和歌山県立近代美術館

「第27回和歌山県美術展覧会」（県展）

県民の美術に関する愛好心と鑑賞力を啓発し、美術作品の創作意欲をさかんにして、本県における美術文化の向上発展に資するために開催する。（48年度県民文化祭参加）
会期　第１期＝11月17日～21日（日本画、書、生花）　第２期＝11月23日～27日（洋画、彫塑）　第３期＝11月29日～12月３日（工芸、写真、現代造形）　新宮地方展＝12月15日～17日（各部門選抜・除生花　／　於・新宮市民会館）
主催　和歌山県教育委員会　和歌山県立近代美術館　毎日新聞和歌山支局　新宮市教育委員会（新宮地方展）
主管　和歌山県美術家協会　／　**後援**　和歌山県　　新宮市（新宮地方展）

「第７回近代美術館友の会習作展」

友の会各実技講座参加者による昭和48年度活動の総括展（日本画、洋画、写真、陶芸）
会期　49年２月24日（一般、中、小展示室）
主催　和歌山県立近代美術館友の会　和歌山県立近代美術館　／　**後援**　和歌山県美術家協会

「第34回国際写真サロン入選作品展」

写真を通じて国際文化の交流と親善をはかる場として知られる「国際写真サロン」の入選作品展
会期　49年３月28日～４月１日（一般、中、小展示室）／**主催**　朝日新聞社　全日本写真連盟　和歌山県立近代美術館

4 貸館展覧会

会期	名称	概要	展示室
4月5日～ 12日	和歌山大学総合美術展	絵画、書、写真、生花／和歌山大学文化連合	全館
12日～ 15日	和菖会書道展	書／県立和歌山商業高校ＯＢグループ	一般展示室
19日～ 22日	和歌山玄旺美術展	洋画／旺玄会和歌山支部	一般展示室
27日～ 30日	和歌山市杏林美術展	絵画、書他／和歌山市医師会グループ	一般展示室
5月2日～ 6日	集団「光」写真展	写真／和歌山市内在住グループ	一般展示室
16日～ 20日	第22回和歌山市美術展・第1期	洋画、彫塑、写真／和歌山市教育委員会	全館
23日～ 27日	同上　第2期	日本画、工芸、書、生花	全館
31日～6月4日	有人クラブ写真展	写真／駒木根紅花主宰	一般展示室
31日～ 4日	佐原光展	洋画／独立美術会員佐原光の受賞記念展	大展示室
31日～ 4日	睦林会南画展	日本画／寺口関山門下	中展／小展
6月7日～ 11日	示現会和歌山巡回展	洋画／中央展作品（選抜）と支部会員作品	全館
28日～7月2日	洋画12人展	洋画／同好グループ	一般展示室
28日～ 2日	和大絵画部2回生グループ展	洋画／和歌山大学絵画部2回生グループ	中展示室
28日～ 2日	オークレイ展	児童画／オークレイ（紙粘土）の造形絵画	小展示室
7日5日～ 9日	エトアール洋画展	洋画／エトアール洋画会	全館
11日～ 16日	葵フォートグループ作品展	写真／亀忠男主宰	一般展示室
12日～ 16日	グループ「しつ」展	漆芸／海南市在住新進漆芸家グループ	小展示室
19日～ 23日	洗心書道会展	書／西林凡石門下	一／中／小
26日～ 30日	オール関西フォートグループ展	写真／関西在住の全日本写真連盟加盟者	一展／小展
26日～ 30日	サークル「形成」展	洋画／同好グループ	中展示室
8月2日～ 5日	和歌山県書道協会展	書／和歌山県書道協会	一／中／小
15日～ 20日	紀翠会展	書／天石東村門下女性グループ	小展示室
16日～ 20日	壱魯会習作書道展	書／大岡皓涯門下	一般展示室
17日～ 19日	星墨会展	書／県立星林高校ＯＢグループ	中展示室
23日～ 27日	グループ「旺美」展	洋画／和歌山市成人学級絵画散室ＯＢ	一般展示室
23日～ 27日	青樹会長	日本画／青樹会	中展示室
23日～ 27日	日高高校洋画部ＯＢ展	洋画／県立日高高校ＯＢグループ	大展示室
25日～ 26日	健筆書道会展	書／名方雄三郎門下	小展示室
30日～9月3日	紀陽銀行・花王石鹸合同美術展	洋画／紀陽銀行・花王石鹸美術クラブ	一般展示室
30日～ 3日	グループ「沸」展	洋画／アトリエ・オノ・ＯＢグループ	小展示室
31日～ 3日	新世紀美術協会展	洋画／新世紀美術協会和歌山支部	中展示室
9月20日～ 24日	三光会展	日本画／山東光風門下	大展示室
21日～ 23日	花王展	絵画、書、写真、手芸等／花王石鹸文化祭	一／中／小
27日～ 30日	具現展	洋画／具現展出品作品（選抜）巡回展	大展示室
27日～ 30日	垣穂短歌会作品展	色紙、短冊、屏風等による自作短歌の発表	中展示室
27日～10月1日	井上人形教室作品展	日本人形／井上人形教室門下	一般展示室
11月8日～ 11日	県民文化祭参加「紙人形」展	紙人形／浅野照子門下	一般展示室
12月6日～ 10日	同「和歌山をさぐる」写真展	写真／全日本写真連盟和歌山県本部	一般展示室
6日～ 10日	同「県下美術サークル連合」展	洋画、日本画／和歌山県美術サークル連合	小展示室
6日～ 10日	あくと展	洋画／中学校美術科教員グループ	中展示室
13日～ 17日	和大絵画部展	洋画／和歌山大学絵画部	一／中／小
20日～ 24日	新県民運動競書会展	書／県下小中学校児童生徒の作品	中展示室
21日～ 23日	県下高校商業美術展	商業美術／和歌山県商業教育研究会	一展／小展
1月12日～ 14日	県下中学校技術家庭科作品展	木工、服飾等／県中学校技術家庭科研究会	一般展示室

19日～ 21日	盆栽展	盆栽／日本盆栽協会和歌山支部	一般展示室
19日～ 25日	和大書道部展	書／和歌山大学書道部	中展示室
24日～ 28日	新構造社和歌山支部展	洋画／新構造社和歌山支部	一展／小展
31日～2月2日	市和商展	商業美術・デザイン／市立和歌山商業高校	一／中／小
2月13日～ 17日	三光会、紀州の風景画展	日本画／山東光風門下	小展示室
14日～ 17日	日中きりがみ展	きりがみ画／中国きりがみ同好グループ	一般展示室
28日～3月4日	県下高校教員美術展	洋画／県下高等学校美術科担当教員	一般展示室
3月7日～ 11日	東紅会展	書／天石東村門下女性グループ	中展示室
14日～ 18日	デザイングループ「鈍」展	デザイン／デザイングループ	一般展示室
14日～ 20日	和大美術科専攻生卒業制作展	洋画／和歌山大学美術課程専攻生	中展示室
21日～ 25日	卯グループ展	洋画／アトリエ・オノ・グループ	一般展示室
22日～ 25日	東風会展	書／天石東村門下	中展／小展
27日～ 31日	県下美術サークル連合展	洋画／和歌山県美術サークル連合	大展示室

5 普及活動

「美術館だより」

「美術館だより」は館の広報紙である。館主催・共催展覧会の紹介および解説、友の会の行事案内や活動報告、和歌山の美術文化関係のニュース、随筆などを掲載している。創刊は昭和40年12月。現在発行部数2,000部。

号No.	発行日	主要記事
88号	4月1日	▷日本伝統工芸秀作展〈解説〉（文化庁　石村速雄）　▷48年度友の会事業計画　▷紀州路の芭蕉句碑〈4〉（南田由次郎）
89号	5月1日	▷友の会春の油絵写生大会　▷県美術家協会総会・友の会評議員会
90号	6月1日	▷第11回県美術家協会展はじまる　▷知られざる熊野の文化財をさぐる（友の会美術鑑賞バス旅行）　▷会長という席（県美術家協会長　斎田武夫）　▷辞任の弁（前県美術家協会長　多田俊彦）　▷美術館での8年間（前県立近代美術館次長　笹尾猛）
91号	7月1日	▷48年度前期常設企画展〈解説〉（酒井学芸員）　▷川口軌外展について（同）　▷書について（主体美術協会員　八幡三郎）
92号	8月1日	▷川口軌外さんを憶う（画家　和田伝太郎）　▷第8回近代美術館友の会展
93号	9月1日	▷父川口軌外を語る（住宅公団理事　川口京村）　▷初秋の南紀白浜を描く（友の会写生旅行）
94号	10月1日	▷川口軌外展／軌外の全貌を探る　▷川口軌外先生と私（海南市長　明楽光三郎）
95号	11月1日	▷第27回県展開幕　▷県展27年のあゆみ　▷東南アジアへの旅（信愛女短大教授　中谷英雄）
96号	12月1日	▷第27回県展の記録　▷東南アジアへの旅〈2〉（中谷英雄）　▷48年度県文化功労賞、文化奨励賞（渡瀬凌雲、保田春彦、エトアール洋画会）
97号	1月1日	▷48年度後期常設企画展　▷川口軌外展をおえて（酒井学芸員）　▷下村観山の生涯と周辺（太田学芸員）　▷新春のごあいさつ（館長、県美術家協会長、美術館友の会長）
98号	2月1日	▷移動美術館開催にあたって（太田学芸員）　▷紀之国産巴里自絵奴会見記（画家　浜田邦男）
99号	3月1日	▷吉田政次遺作展について（酒井学芸員）　▷東南アジアへの旅〈3〉（中谷英雄）

「友 の 会 活 動」

和歌山県立近代美術館友の会は、一般の美術愛好層で組織され、年間を通じて、県民の美的素養の向上に寄与する諸活動を行なっている。昭和40年10月発足。48年３月末現在の会員数は924人（一般会員846、賛助会員78）。

○活動状況

（註　期日、行事名、〈テーマ〉、講師、実施場所の順に記載。省略されている項は前回例会に同じ。）

4月８日　**洋画実技講座**〈桃のある田園風景〉県美術家教会　小川英夫（上級）中島久次(初級)／那賀郡貴志川町甘露寺周辺
同　**写真実技講座**〈４月の撮影会・陽春の和歌浦と紀三井寺〉全日本写真連盟本部委員／和歌山市和歌浦(午前)～紀三井寺(午後)
15日　**写真実技講座**〈月例コンテストと作品指導〉県美術家協会　駒木根紅花／美術館
同　**日本画実技講座**〈南画の基本（初級）山水を描く〈(上級)〉県美術家協会寺口関山／美術館
同　**陶芸実技講座**（初級）〈楽焼による初歩の陶芸制作〉県美術家協会　山本学／美術館
22日　**日本伝統工芸秀作展記念講演会**（兼・美術鑑賞講座）〈現代における日本の伝統工芸〉美評術論家　鈴木健二／県民文化会館
同　**陶芸実技講座**（上級）〈ロクロによる陶芸制作のテクニック〉県美術家協会　柏井良夫／美術館
28日　**陶芸実技講座**（焼成）／美術館
5月13日　**73年度友の会油絵写生大会**（兼・洋画実技講座）〈新緑の和歌山公園を描く〉県美術家協会　多田俊彦・斎田武夫・浜田邦男・倉田純三／和歌山公園内一帯
同　**陶芸実技講座**（初級）
20日　**日本画実技講座**〈花鳥画の基本（初級）花鳥を描く〈(上級)〉県美術家協会青木虹興／紀の国会館
同　**写真実技講座**／県美術家協会　西川高三／県民文化会館
25日　**伊都路の社寺訪門バスツアー**（兼・美術鑑賞講座）〈丹生都比売神社の周辺をたずねて〉神戸山手女子短期大学教授　和高伸二／伊都郡かつらぎ町天野
26日　**陶芸実技講座**（焼成）
6月17日　**日本画実技講座**／県民文化会館
同　**洋画実技講座**〈静物―花と果物〉浜田邦男／紀の国会館
同　**陶芸実技講座**（初級）
同　**写真実技講座**／県美術家協会　五十嵐靖郎
24日　**陶芸実技講座**（上級）
28日／30日　**熊野三山文化財めぐりバスツアー**（兼・美術鑑賞講座）〈知られざる熊野三山の文化財をたずねて〉和高伸二／大辺路～中辺路
7月７日　**陶芸実技講座**（焼成）
15日　**日本画実技講座**／美術館
同　**洋画実技講座**〈７月の紀の川を描く〉浜田邦男／那賀郡岩出町岩出橋周辺
同　**陶芸実技講座**（初級）
同　**写真実技講座**／県美術家協会　木村太郎
22日　**陶芸実技講座**（上級）
同　**写真実技講座**〈７月の撮影会・観心寺と河内の風物〉県美術家協会　亀　忠男／河内長野市観心寺周辺
28日　**陶芸実技講座**（焼成）
8月５日　**洋画実技講座**〈友の会出品作品を描く―静物〉倉田純三／美術館
8日／12日　**第８回県立近代美術館友の会展**〈日本画・洋画・工芸・書・写真ほか〉美術館
12日　**日本画実技講座**
同　**写真実技講座**〈月例コンテスト〉亀　忠男
9月８日／９日　**友の会白浜写生旅行**〈初秋の南紀白浜風景を描く〉県美術家協会　益山英吾・斎田武夫／西牟婁郡白浜町臨海～三段壁周辺
９日　**陶芸実技講座**（初級）県美術家協会　吉増達夫
16日　**日本画実技講座**〈紅葉谷園の山水を描く〉／和歌山公園紅葉谷
同　**写真実技講座**／県美術家協会　島村安彦
23日　**陶芸実技講座**（上級）
28日　**美術鑑賞講座**〈川口軌外芸術のあれこれ〉和高伸二／美術館
30日　**写真実技講座**〈９月の撮影会・室内ヌードの撮りかた〉西川高三
10月６日　**陶芸実技講座**（焼成）
14日　**日本画実技講座**〈花鳥画の基本（初級）花鳥を描く〉県民文化会館
同　**陶芸実技講座**（初級）
21日　**洋画実技講座**〈静物―果物と野菜〉中島久次／水産会館
同　**陶芸実技講座**（上級）
同　**写真実技講座**〈月例コンテスト〉西川高三
同　川口軌外展記念講演会(兼・美術鑑賞講座)〈近代美術史における川口軌外と芸術とその意義〉和高伸二／県民文化会館
28日　**正倉院展・佐保路めぐりバスツァー**（兼・美術鑑賞講座）〈正倉院展鑑賞と佐保路の名刹訪門〉奈良国立博物館　／奈良国立博物館、平城宮趾、法華寺、秋篠寺他
11月３日　**陶芸実技講座**（焼成）
11日　**洋画実技講座**〈港のみえる街景色〉中島久次／南海臨港線・築地橋駅周辺
18日　**日本画実技講座**〈写生画の基本と制作〉県美術家協会　古村徹三／美術館
25日　**写真実技講座**／亀忠男
12月16日　**日本画実技講座**／紀の国会館
同　**写真実技講座**／五十嵐靖郎
23日　**洋画実技講座**〈コスチュームの女性像〉山東好雄／県文化会館
1月13日　**日本画実技講座**／県民文化会館
同　**洋画実技講座**〈静物画のいろいろ〉倉田純三／美術館
同　**陶芸技実講座**（各級合同）
同　**写真実技講座**／西川高三／美術館
同　**美術鑑賞講座**〈新春を迎えて〉和高伸二／県民文化会館
同　**友の会初春交歓パーティ**／美術館
26日　**陶芸実技講座**（焼成）
2月10日　**陶芸実技講座**（初級）
17日　**日本画実技講座**／美術館
洋画実技講座〈コスチュームの女性像〉小川英夫／県民文化会館
陶芸実技講座（上級）
写真実技講座／木村太郎／県民文化会館
20日／24日　**第７回友の会習作展**〈日本画・洋画・陶芸・写真〉美術館
3月２日　**陶芸実技講座**（焼成）
10日　**洋画実技講座**／美術館
同　**陶芸実技講座**（初級）
16日　**美術鑑賞講座**〈南紀男山焼展を観る〉県立博物館学芸員　中村貞史／県立博物館
17日　**陶芸実技講座**（上級）
24日　**日本画実技実座**〈養翠園を描く〉養翠園
同　**写真実技講座**〈最終月例コンテストと48年度「年度賞」受賞式〉西川高三ほか
30日　**陶芸実技講座**（焼成）

6　昭和48年度所蔵作品・寄託作品

「購入作品」

1	川口軌外	ボヘミアン	油彩・キャンバス	130.0× 96.0	1928
2	〃	地　維	〃	193.5×154.5	1932
3	〃	日傘と人	〃	119.5× 89.6	1953

「寄贈作品」

1	国枝金三	麗　日	油彩・キャンバス	90.8 × 72.2	1939
2	〃	島の四月	〃	65.3 × 80.2	1917
3	〃	卓上静物	〃	60.6 × 72.2	1919
4	〃	紀州風景	〃	45.4 × 52.9	1919
5	〃	海　辺	〃	50.1 × 72.7	1929
6	亀井玄兵衛	加茂の娘	紙本着彩	228.0×156.0	1948
7	〃	髪	〃	193.0×126.0	1949

8	〃	谷　水	絹本着彩	181.0×106.0	1952
9	〃	郊外風景	紙本着彩	178.0× 97.0	1953
10	〃	道	〃	105.5×180.5	1953
11	〃	鐘の前	〃	180.7×105.7	1955
12	〃	みのり	〃	165.0×122.0	1961
13	〃	秋　瀑	〃	220.0× 97.0	1964
14	〃	観音立像	〃	121.0× 74.5	1965
15	〃	白　梅	〃	71.0×120.0	1968
16	〃	石と木	〃	124.0×166.0	1960

「寄託作品」

1	川口軌外	裸　婦	油彩・キャンバス	63.3× 79.0	1917	
2	〃	少　女	〃	64.2× 53.5	1920〜3	
3	〃	模写（スザンヌ・オーバン）	〃	97.0×145.9	1920〜3	
4	〃	〃（ヴィーナス）	〃	93.5×138.4	1920〜3	
5	〃	風　景	〃	53.0× 46.5	1920〜3	
6	〃	婦人像	〃	59.8× 49.0	1920〜3	
7	〃	風　景	〃	64.7× 79.7	C1924	
8	〃	静　物	〃	72.0× 59.3	1925	
9	〃	風　景	〃	65.0× 80.5	C1925	
10	〃	裸婦群像	〃	87.3× 94.5	C1925	
11	〃	仰臥裸婦	〃	59.5× 80.0	C1926	
12	〃	窓辺の静物	〃	74.9× 64.7	1924〜6	
13	〃	黄　壁	〃	59.2× 72.3	1927〜8	第1回独立展
14	〃	静　物	〃	72.3× 60.0	1927〜9	
15	〃	写　像	〃	116.0× 88.3	1927	
16	〃	座する女	〃	116.6× 72.7	1927	
17	〃	サーカス	〃	117.0× 81.0	1927〜8	第5回1930展
18	〃	老　人	〃	114.4× 71.1	1927〜8	〃
19	〃	裸　婦	〃	91.5× 73.0	1927〜9	
20	〃	臥す女	〃	81.0×110.0	1927〜9	第5回1930展
21	〃	車のある風景	〃	73.4×116.5	1928	第16回二科
22	〃	バナナのある静物	〃	90.4× 72.3	1928	
23	〃	月空下絵	〃	72.6× 91.0	1930	
24	〃	スブニール	〃	116.5× 80.4	1932	第2回独立展
25	〃	静　物	〃	115.1× 78.7	1932	〃
26	〃	花	〃	115.0× 88.8	1932	
27	〃	貝　殻	〃	81.0×116.0	1936	第6回独立展
28	〃	無　題	〃	160.5×112.0	1935	第5回独立展
29	〃	エスキースB	〃	161.5×130.5	1937	第7回独立展
30	〃	少女と子供	〃	116.0× 91.0	1937	
31	〃	二　婦	〃	161.5×130.0	1939	第9回独立展
32	〃	夏の海	〃	166.0×266.5	1940	第10回独立展
33	〃	熊野灘	〃	161.0×129.8	1940	紀元2600展
34	〃	ひまわり	〃	72.9× 91.0	1943	第13回独立展
35	〃	魚　商	〃	90.9×116.5	C1939	

36	川口軌外	群　像	油彩・キャンバス	116.7× 73.0	1941	
37	〃	光	〃	115.0× 80.0	1950	第24回国展
38	〃	作　品	〃	145.0×111.3	1951	
39	〃	花	〃	98.9× 71.6	1956	第26回国展
40	〃	鳥の情態	〃	129.0× 88.0	1952	〃
41	〃	集　団	〃	90.5× 72.8	1953	第2回サンパウロ・ビエンナーレ
42	〃	Composition	〃	116.7× 86.2	1953	〃
43	〃	作品B	〃	89.6× 71.2	1955	第29回国展
44	〃	作品C	〃	99.5× 72.2	〃	〃
45	〃	夏の浜	〃	115.1× 89.9	〃	第3回日本国際
46	〃	水浴する人たち	〃	116.5× 90.7	〃	〃
47	〃	作　品	〃	80.0× 64.4	〃	日米抽象展
48	〃	人　体	〃	80.2×116.8	1956	第2回現代日本
49	〃	構　図	〃	116.0× 79.5	〃	第30回国展
50	〃	群　像	〃	116.0× 79.5	〃	〃
51	〃	集　団	〃	160.0×112.0	〃	第2回現代日本
52	〃	鳥と人	〃	115.8× 79.8		
53	〃	人　体	〃	129.4× 88.2	1957	第4回日本国際
54	〃	人　体（青調の人体）	〃	129.4× 88.2	〃	
55	〃	樹間と鳥	〃	193.0×130.0	1958	第3回現代日本
56	〃	三つのポーズ	〃	160.0×129.5	1959	第5回日本国際
57	〃	水浴の人々	〃	115.0× 79.0	1960	第4回現代日本
58	〃	作　品	〃	162.0×130.0	1961	第6回日本国際
59	〃	顔のある木	〃	115.0× 78.5	1962	第5回現代日米
60	〃	群　像	〃	129.4× 88.6	1962	第5回現代日本
61	〃	鳥	〃	161.2×129.5	1963	第7回日本国際
62	〃	森の中	〃	116.0× 95.7	1964	第6回現代日本
63	〃	人	〃	129.8× 89.7	1964	第6回現代日本
64	〃	人　体	〃	145.5× 97.0		
65	〃	円	〃	130.1× 97.3		
66	〃	群　像	〃	117.0× 80.2		
67	〃	鳥	〃	116.2× 90.8	1958	
68	〃	作　品	〃	117.0× 80.2	1960	
69	〃	人　体	〃	116.8× 80.3	1958	
70	〃	花	〃	90.8× 72.8		
71	〃	作　品	〃	100.2× 72.8		
72	〃	作　品	〃	72.8× 53.2		
73	〃	群　像	〃	116.7× 73.0	1941	

7 所蔵品貸出状況

貸出先	展覧会名・会期	貸出作品	種別	点数
奈良県立美術館	「明治時代の彫刻」 48・9・2～9・30	建畠大夢 作 「おゆのつかれ」	彫刻	1
サントリー美術館	「大正の心と美」 48・10・2～11・18	石垣栄太郎 作 「街」	洋画	1
梅田近代美術館	「川口軌外展」 49・2・9～3・3	川口軌外 作「ボヘミアン」 「地　維」 「日傘と人」	洋画	3

8 県立近代美術館協議会委員

氏名	住所
明楽光三郎	海南市日方582
川瀬浩一	御坊市御坊79
大岡皓崖	和歌山市黒田168の9
桐山義雄	和歌山市北新元金屋町7
楠見勝寛	和歌山市新在家56
斉田武夫	和歌山市湊671
島村安彦	和歌山市磯山町4-2
杉本義夫	新宮市船町2-6-6
玉井一郎	和歌山市寺町13
出水清治	和歌山市府中1182
寺田健治	和歌山市新堀北ノ丁3-40
尾藤昌平	和歌山市新堀七軒町5
室谷文男	和歌山市園部有功ケ丘団地152の8
富松助六	和歌山市北坂ノ上丁1
脇村正太郎	田辺市栄町52

会　長　明楽光三郎

副会長　室谷文男

9 県立近代美術館職員構成

館長　渡辺光男

次長　髙　巌

（庶務課）

課長　吉田禎之

主事　辻本介彦

技師　松下勝行

（事業課）

課長　野口照彦

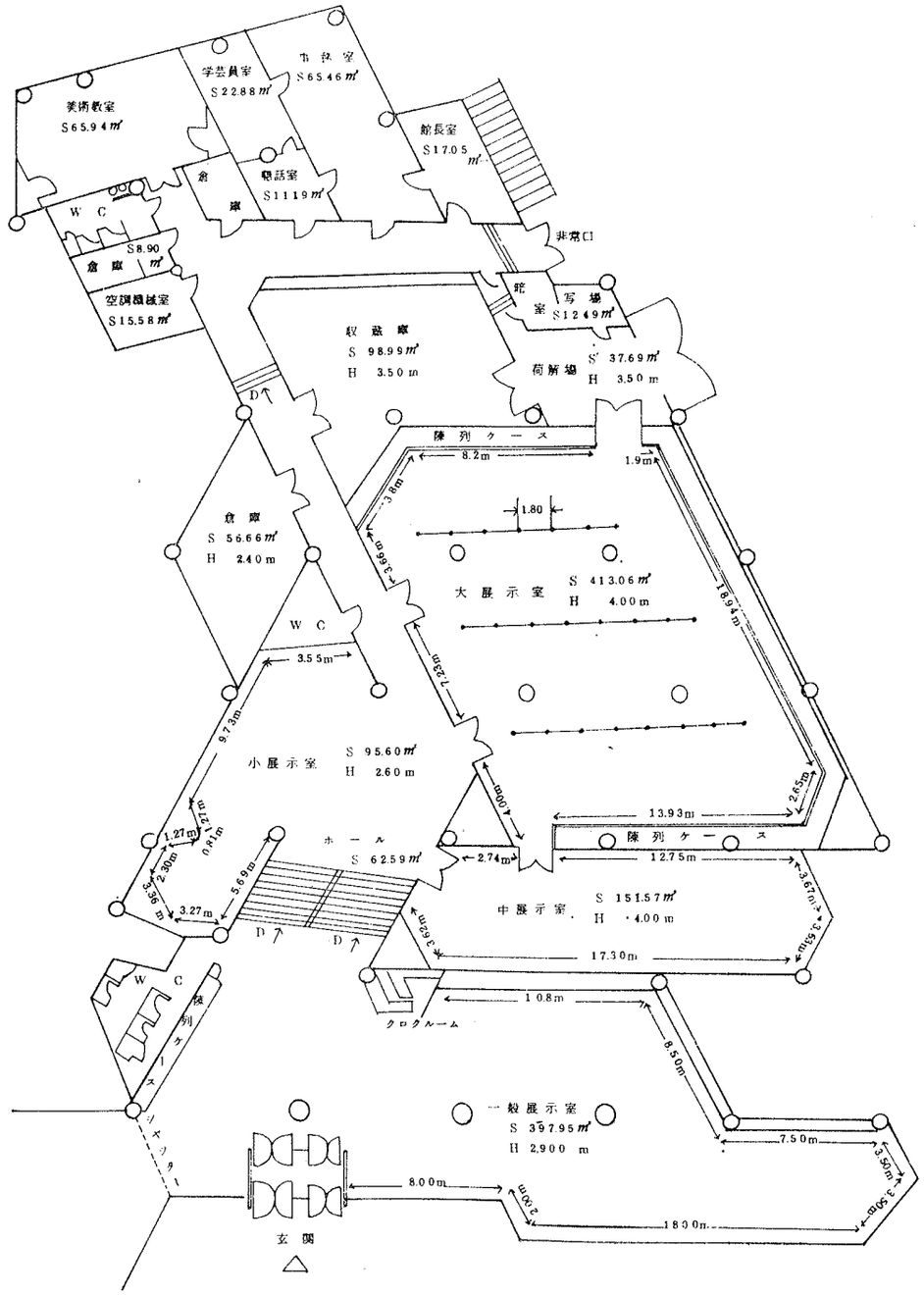
主査　南川諄一

学芸員　酒井哲朗

学芸員　太田将勝

嘱託　和髙伸二（非常勤）

10 近代美術館配置図



和歌山県立近代美術館年報
昭和48年度

昭和50年3月31日　印刷
昭和50年3月31日　発行

編集・発行
和歌山市小松原通1丁目
和歌山県立近代美術館

印刷所　井手印刷株式会社